
第五章

歴史文化保存活用区域の方向性

(1) 佐敷上グスク・場天御嶽周辺保存活用区域プラン

1) 現状の整理

ア) 区域内の歴史文化資源の特徴

- 佐敷字佐敷は、『おもろさうし』に「さしき」として登場し、17世紀の『琉球国高究帳』にも「佐鋪村」と記される。佐敷間切の主邑として間切番所が置かれていた。佐敷字新里は『琉球国高究帳』には大里間切下里村とみえ、『琉球国由来記』では佐敷間切新里村とみえる。尚巴志の祖父である佐銘川大主が村立てをしたと伝わる。
- 佐敷上グスクは、14～15世紀に思紹・尚巴志親子によって築城されたとされるグスクで、標高40～50mの舌状台地の先端部に立地する。別名「上グスク」と呼ばれている。城郭の最上段に上城の嶽があり、内部にはカマド跡、内原の殿、旧石段路、親井、尚巴志王遺跡碑文（1922年）、つきしろの宮（1938年建立、62年再建）などがある。現在、国指定文化財（史跡）に向けて準備を進めている。
- 佐敷グスク周辺には、苗代大比屋屋敷跡、苗代殿、佐敷ようどれ、美里ガー、美里殿、つきしろの岩・井、佐敷ノロ殿内など、思紹や尚巴志に縁のある資源が分布しており、佐敷上グスクを中心に東廻りの巡拝ルートともなっている。
- 場天御嶽は、琉球王国を統一した尚巴志の祖父・佐銘川大主の居住地であり、第一尚氏王統の始祖の地として知られている。本来の場天御嶽の地は地滑りにより消失したため、新里集落の拝所であるイビの森へ合祀されたが、現在もかわらず人々の信仰の地として拝まれている。
- 佐敷集落の前面には、佐敷干潟や富祖崎のハマジンチョウ群落など特徴的な海の資源がみられる。
- 1903（明治36）年に一部が富祖崎村となり、また与那嶺村を編入した。

表 区域内の主な歴史文化資源

| 名称 | タイプ | 概要 |
|-----------|----------|---|
| 佐敷上グスク | グスク | 尚巴志およびその父尚思紹の居住跡。14～15世紀に築城されたといわれ、現在グスク内には上城の嶽、カマド跡、内原の殿、親井、尚巴志王遺跡碑文、旧石段路、つきしろの宮などがある。 |
| 佐敷ノロ殿内 | 御嶽・拝所 | 佐敷グスクの入口近くに所在し、コンクリート造の祠内部に香炉が置かれている。 |
| 美里殿 | 御嶽・拝所 | 尚思紹の舅である美里之子の住居跡とされる。現在は、コンクリート製の拝所が設けられている。 |
| 美里井 | 樋川・井戸、拝所 | 美里殿の入口にあり、美里殿の用水井戸、祝女のみそぎの場であったという。 |
| 苗代大比屋の屋敷跡 | 御嶽・拝所 | 苗代大屋（後の尚思紹）の屋敷跡とされる。現在は、尚思紹の位牌等をまつるコンクリート製の建物があり、地元では神アシャギと呼んでいる。 |
| 苗代殿 | 御嶽・拝所 | つきしろの岩・井の奥（南隣り）にある。2本の石柱だけが残っている。その奥に1967年に造られたというコンクリートブロック造の拝所がある。 |
| つきしろの岩・井 | 御嶽・拝所 | 美里之子の娘が、赤子の尚巴志を捨てた場所、産湯をつかった井戸とされる。大岩の下に円形の井戸があるが、水は枯れている。 |
| 場天御嶽 | 御嶽・拝所 | 尚巴志の祖父である佐銘川大主が、伊平屋島から逃げのびてきた地。現在は地すべり被害によりイビの森に他の拝所と共に合祀されている。 |
| 宮城殿 | 御嶽・拝所 | 手登根大比屋（尚思紹の五男といわれる）の子息である手登根里之子の住居跡であるとされる。 |
| 新里ノロ殿内 | 御嶽・拝所 | 字新里の氏神を祀っている。戦前は旧暦5月・6月のウマチーの際、神馬にまたがった白装束の場天ノロ（新里ノロ）と場天根人を先頭に行列が場天御嶽やノロ |

| 名称 | タイプ | 概要 |
|-------------|-------|--|
| | | 殿内を参拝していたが、戦後途絶えた。 |
| 新里殿 | 御嶽・拝所 | 新里ノ口殿内近くに所在する。 |
| 佐敷ようどれ | 墓 | 尚思紹夫婦、美里子夫婦、尚思紹の次男美里比屋夫婦、娘の佐敷のろくもいを祀った琉球石灰岩製の墓で、半円形の屋根を持った駕籠方の独特な形をしている。当初は現在地より北側崖下にあったが1764年に移築された。1959年には佐銘川大主夫婦も合祀された。 |
| アダニ山の跡にあるカー | 樋川・井戸 | 佐敷グスクのほぼ真北方向の国道沿いはアダニ山跡といわれ、そこに現在も井戸が残っており、尚巴志がこの井戸水を水田に使用していたという伝承がある。 |
| 土帝君 | 御嶽・拝所 | 土帝君は島尻県では旧佐敷町域にしかない。琉球石灰岩の上に漆喰を塗りこめて成型した祠がある。 |

イ) 都市計画等の指定状況

- 旧佐敷町域はこれまで那覇広域都市計画区域に属し、宇佐敷は市街化調整区域となっていたが、平成22年に南城市単独の都市計画区域として再編された。
- 佐敷グスクの史跡範囲及び周辺、馬天御嶽周辺を平成22年に風致地区1種及び4種に指定。
- 「南城市都市マスタープラン」（平成21年11月策定）では、シュガーホールを含む国道331号沿道を中心とした地区を市街化拠点と位置づけており、同地区も一部含まれる。
- 佐敷グスク及び場天御嶽の北側農地は農用地区域（農振農用地）に指定。
- 場天御嶽の後背斜面及び佐敷ようどれ周辺は地すべり危険箇所指定。

ウ) 文化遺産に関連する計画等

■「佐敷グスク及び周辺整備基本計画」（平成10年3月）

佐敷グスク一帯（11.7ha）を歴史・文化拠点と位置付け、周囲の自然環境とともに保全活用を図ることを目的に策定された。佐敷グスクを中心に段階的な事業化を図ることが位置づけられている。第1期の佐敷グスクやタキノゾーンの一部からなる地区（6.8ha）では史跡範囲の風致の回復や緑地の保全、芝生広場や親水空間の整備が計画されている。（詳細は別途整理）

■「東御廻いを活用した地域振興に関する調査」（平成7年3月）

東御廻り（アガリウマーイ）を沖縄の歴史・文化の学習の場として、また聖地巡礼の道として位置づけ、新たな観光資源として活用するための基本構想。佐敷は、①東御廻りコース、②宿次のみちコース、③グスク巡りコース、④尚巴志ゆかりのコースに位置づけられている。（詳細は別途整理）

エ) 拠点施設・主なイベント・関連団体等

■シュガーホール

平成6年に開館した音楽専用ホールとコミュニティ供用施設を有する複合施設である。国内外のアーティストによるコンサートの開催や、町民ミュージカルなどの町民参加舞台事業を継続的に展開している。

■尚巴志ハーフマラソン

平成13年より始まったハーフマラソン大会。尚巴志を生んだ本市の自然や歴史、文化を体験しながら、周辺地域の活性化を図る目的で開催しており、佐敷がスタート・ゴール地点となっている。

■佐敷干潟で遊び学ぶ しあわせまねきの会

平成13年に発足された自然保護活動を行なう自主組織。佐敷干潟の観察・学習会を開催し、南城市内の中学校のボランティア委員会の研修を受け入れている。

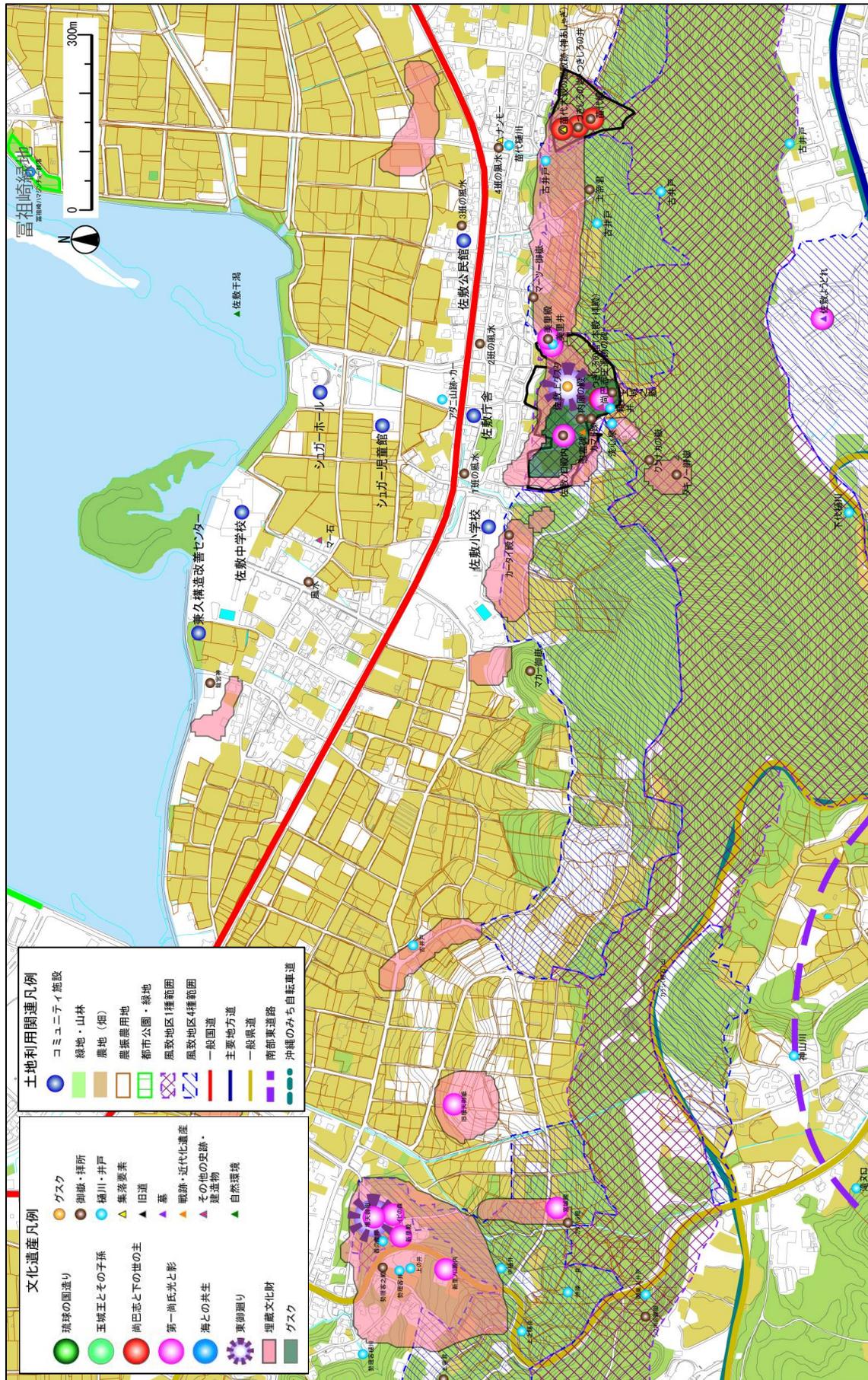
■つきしろ奉賛会

第一尚氏の氏子による組織であり、1938（昭和13）年につきしろの宮を建立した。現在、旧暦9月15日に例祭を行なう他、県内の関係者がつきしろの宮を参拝する。

オ)文化遺産保存・活用の課題

- 佐敷上グスクは、他の史跡に比べると観光や歴史探訪での利活用が少ない傾向にある。
- 佐敷集落は、道路整備や住宅建築等により戦前までの様相から変化し、生活と密接に関係した景観資源やたたずまいが薄れつつある。
- 尚巴志の繁栄は佐敷上グスクを拠点とした海外貿易にあるとされており、グスクと海との関わりは重要な視点だと考えられるが、現状では文化遺産と海域資源（佐敷干潟や富祖崎ハマジンチョウ植物群落等）を結びつけた活動はほとんど行われていない。
- 尚巴志に関わる伝承や文化遺産は多様で豊富であるが、佐敷が区（字）としてその資源を有効活用できていない面がある。

図 区域の現況図



2) 保存・活用の方針

場天御嶽は、琉球王国を統一した尚巴志の祖父・佐銘川大主の居住地であり、第一尚氏王統始祖の地として知られています。本来の場天御嶽は地滑りにより消失したため、新里集落の拝所であるイビの森へ合祀され、現在もかわらず人々の信仰の地として拝まれています。一方、佐敷上グスクは尚思紹・巴志親子によって築かれたグスクであり、南城市のみならず沖縄県の歴史を語る上で重要です。尚巴志が民衆を治め、海上貿易で台頭し、軍事力を磨いて周辺地域を束ね、ついには三山統一を成し遂げる——その原点は佐敷小按司と呼ばれた幼少期から青年期にかけて過ごしたこの地域にあります。尚巴志にまつわる関連文化財群と周辺環境を一体的に保存し、関連する芸能・民俗・伝承等の復興に努め、尚巴志を地域のシンボルとしてこれからも大事にします。

■区域の歴史文化育成方針

①グスクを中心に周辺文化遺産の一体的な保全と活用を進める。

- 現在、市指定である佐敷上グスクの上位指定（国指定）を実現するとともに、佐敷上グスクについて積極的な情報発信を進めて、観光や歴史探訪等の利用を活性化する。
- グスク（史跡範囲）と周辺文化遺産が一体的な雰囲気を持つような保全と景観整備を進め、利用連携を図るとともに、相互の文化遺産の関連性を示す情報提供を充実する。
- 宿道であった集落の中道、里道を活用した集落散策ルートを確認する。また、丘陵上の佐敷ようどれとの周遊ネットワーク化を図る。
- ハンタ緑地と連担しながらグスクを囲む緑地を一体的に保全するとともに、佐敷上グスクや佐敷ようどれにおける眺望点を確保し、佐敷干潟や富祖崎緑地への眺望景観の確保を図る。

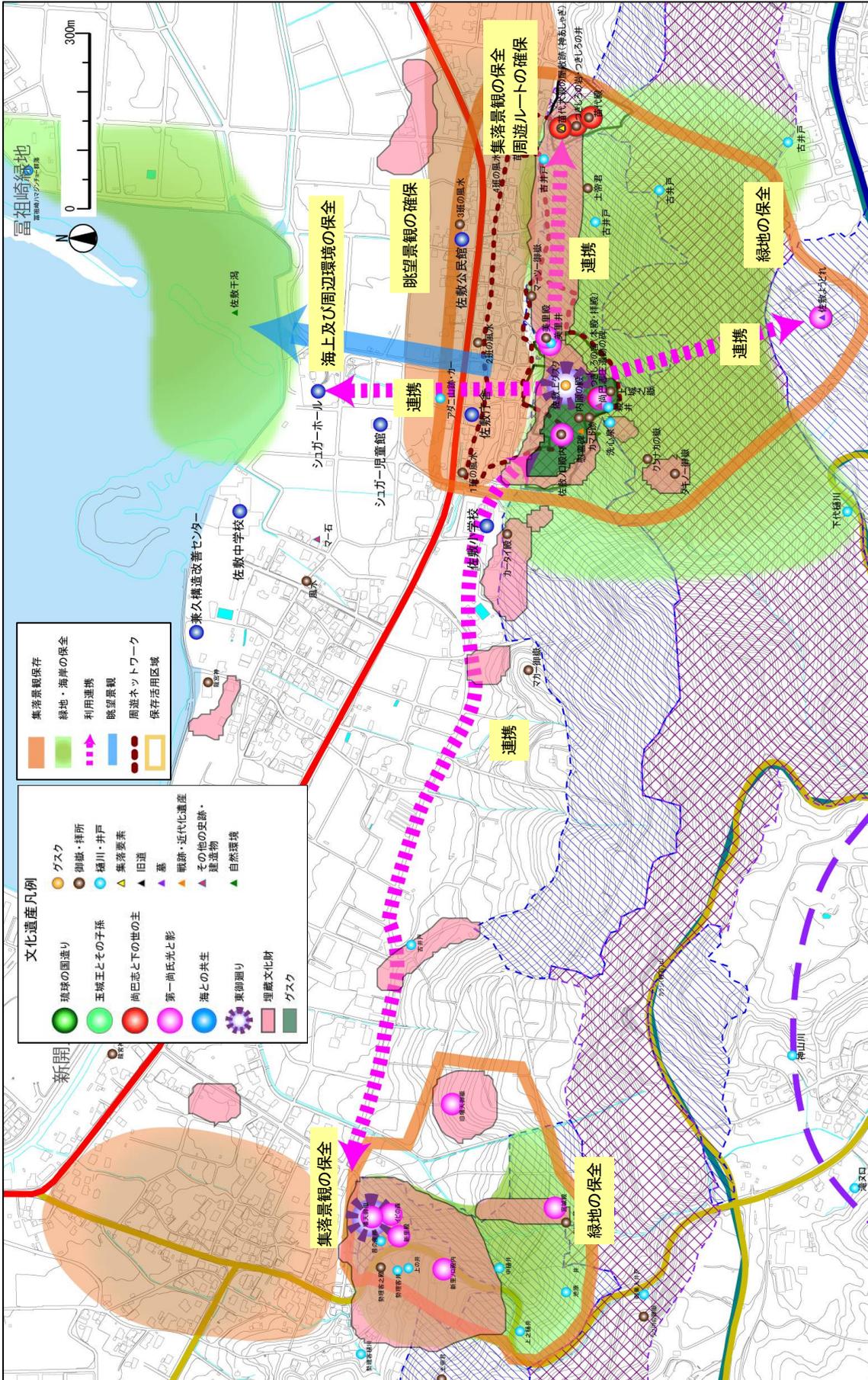
②場天御嶽の知名度と魅力を向上させる。

- 場天御嶽、上場天御井戸、下場天御井戸、御天竺、伊平屋神など関連文化財群を総体として保全するとともに、イビの森一帯の景観保全・環境保全に努める。
- 巡礼や礼拝、散策などの活動の便宜を図る方策について検討し、案内板やパンフレットなど地域情報の提供機会を拡大する。
- 新里集落内の拝所やカー、石垣や生け垣等の屋敷跡を保全し、集落内の美化・修景による良好な住環境を保全するとともに、道ジュネーなどの際の拝所を結ぶ歴史的な道の環境整備を図る。

③歴史にヒントを得た芸術文化、芸能などの活動を推進する。

- 地域の歴史文化を掘り起こし、発見された歴史事象をテーマにした地域活動、芸能活動、芸術活動を促進する。特に尚巴志（及び佐銘川大主）をテーマとした題材には力を入れ、子ども会や青年会、老人会等の活動を支援するなど、区域の住民に尚巴志の子孫（広義）である共通認識を育てる。
- シュガーホールの出前講座を、佐敷上グスクやイビの森周辺で受け入れるなど、歴史文化資源が市民活動の場としても活用されるような運営を進める。

図 区域の構想図



(2) 津波古の伝統芸能保存活用区域プラン

1) 現状の整理

ア) 区域内の歴史文化資源の特徴

- 通称「馬天」の名で知られる。『琉球国高究帳』で「島添大里間切つはのこ村」とあるが、『琉球国由来記』では「佐敷間切津波古村」となっており、大里間切から佐敷間切へ間切替えがあったことがわかる。
- 伝承では三山鼎立時代から開け、後に北山系統の移住者も加わって村ができた。最初は丘陵上にあったが、次第に平坦地に集落が広がったという。そのため、集落西側の斜面緑地には津波古村立ての4ムトゥである喜屋武久殿、外間殿、大松堂之殿やその墓が、集落の北側には土帝君や多和田殿等が所在している。喜屋武久殿や外間殿については、北山落城の際、大里按司の取りなしで許されてこの地に居を構えたとの伝承が残されている。
- 馬天港一帯の海岸を古くは馬天浜といい、聞得大君の御新下りのときの斎場御嶽への道筋で、国王の久高島参詣にも用いられた。また明治以降には、国頭地方からの山原船による木材・薪炭などの移入港として栄えた。
- 明治中期頃から移住者が増え、海岸近くに集落を形成し、ハマヤー（浜屋）と呼ばれた。戦後1972年には、地先が埋め立てられて「新開」として広がった。
- 天人や棒術、獅子舞など伝統芸能が有名である。また、津波古棒術保存会、天人保存会をはじめ住民の組織体制がしっかりしており、小さな文化祭や豆腐サミットなど様々な取り組みが行われている。

表 区域内の主な歴史文化資源

| 名称 | タイプ | 概要 |
|---------|-------|--|
| 喜屋武久殿 | 御嶽・拝所 | 尚巴志に滅ぼされた北山王の四男喜屋武久子の住居跡とされる。三方石積み、赤瓦葺きの建物である。市指定建造物である。 |
| 今帰仁ウトウシ | 御嶽・拝所 | 喜屋武久殿の傍らに所在し、喜屋武久子の父・攀安知王(今帰仁城)に向けて香炉が置かれている。 |
| 喜屋武久子の墓 | 墓 | 津波古むら立ての4ムトゥのひとつで、尚巴志に滅ぼされた北山王の四男喜屋武久子の墓とされる。 |
| 安次富殿 | 御嶽・拝所 | 喜屋武久子の義父である安次渡子(安次渡子の娘は、喜屋武久子の二度目の妻にあたる)の居住跡と考えられている。 |
| 外間殿 | 御嶽・拝所 | 津波古むら立ての4ムトゥのひとつで、尚巴志に滅ぼされた北山王の三男外間子の居住跡とされる。コンクリート造の拝所がある。 |
| 外間子の墓 | 墓 | 尚巴志に滅ぼされた北山王の三男外間子の墓。上津波古の村づくりをした。 |
| 多和田殿 | 御嶽・拝所 | 津波古むら立ての4ムトゥのひとつで、多和田子の屋敷跡とされる。コンクリート造の神屋に位牌等を祀っている。多和田門中が拝むほか、字津波古の拝所ともなっている。 |
| 多和田子の墓 | 墓 | 津波古の創始者の一人である多和田子の墓とされる。海岸近くの岩の海水に侵食されて出来た穴を利用した墓で、前面を雑石で積み、石蓋で墓口を塞いでいる。 |
| 大松堂殿 | 御嶽・拝所 | 津波古むら立ての4ムトゥのひとつで、字津波古の拝所でもある。コンクリートブロック造の祠がある。 |
| 土帝君 | 御嶽・拝所 | 木造の祠で、内部に孔子像が祭られている。旧暦2月と8月の彼岸祭には、津波古の4つの殿と御嶽を拝み、土帝君で祭祀を行う。その他の行事でも御願が行われる。 |

| 名称 | タイプ | 概要 |
|---------|-------|--|
| アーマンチュ森 | 御嶽・拝所 | 天人(アーマンチュ)が降立ったという伝承があり、拝所の岩には足跡が残っている。 |
| 天人 | 芸能 | 芸能。ストーリーは、福人の大主がアマンチュ(天人)から五穀の種子、長者の大主の位を授けられ、一家の繁栄を祈るというもの。 |
| 棒術 | 芸能 | 津波古の棒術には、歌三線にのせて演ずるメーカタ(舞方)、ドラに合わせて演ずる一人棒、二人棒、三人棒、四人棒、五人棒の組棒がある。 |
| 獅子舞 | 芸能 | 旧盆明け8月17日のヌーバレーでは悪霊払い、十五夜には集落の繁栄を祝って舞われる。 |
| 馬天港 | 生産技術 | 馬天の浜ともいわれ、国王の久高島参詣でも利用されるなど交通の要所となる港だった。明治以降は山原船の港として栄えた。 |

イ) 都市計画等の指定状況

- 旧佐敷町域は那覇広域都市計画区域に属し、宇津波古は市街化区域(用途地域)となっていたが、平成22年に南城市単独の都市計画区域として再編された。
- 島添大里グスク下のハンタ緑地一帯が平成22年に風致地区4種に指定。
- 「南城市都市マスタープラン」(平成21年11月策定)では、市街化拠点(「シュガーホールを含む国道331号沿道を中心とした地区」として位置づけられている。
- 津波古集落南側農地が農用地区域(農振農用地)に指定。
- 喜屋武久殿等の周辺斜面及び津波古集落が地すべり危険箇所指定。

ウ) 文化遺産に関連する計画等

文化遺産に関する関連計画は特になし

エ) 拠点施設・主なイベント・関連団体等

■津波古児童公園(土帝君公園)

南城市の都市計画公園の街区公園に該当する。土帝君を祀った場所が公園化されたもので、公園として供されるほか、津波古の地域祭祀やヌーバレーなど伝統芸能が行われる場所でもある。

■かやぶち家

津波古にある個人所有の古民家であり、津波古棒術保存会主催による小さな文化祭を始め、ゆんたく庭やコンサートなど、コミュニティ活動の場として利用されている。

■豆腐サミット

津波古に古い豆腐屋があることから、同志が集まって2007年に第1回豆腐サミットが開かれた。区の行事にあまり参加していない若手を引き込むための仕掛けとして企画されており、地域を改善しようとする若者の動きがみられることが興味深い。

■津波古棒術保存会

棒術の担い手を中心とする保存会であり、約20名が所属している。市内のみならず、県内外のイベントにも多数出演して伝統芸能として知名度も高い。また若手を要する団体として地域活動の中心的な担い手となっている。

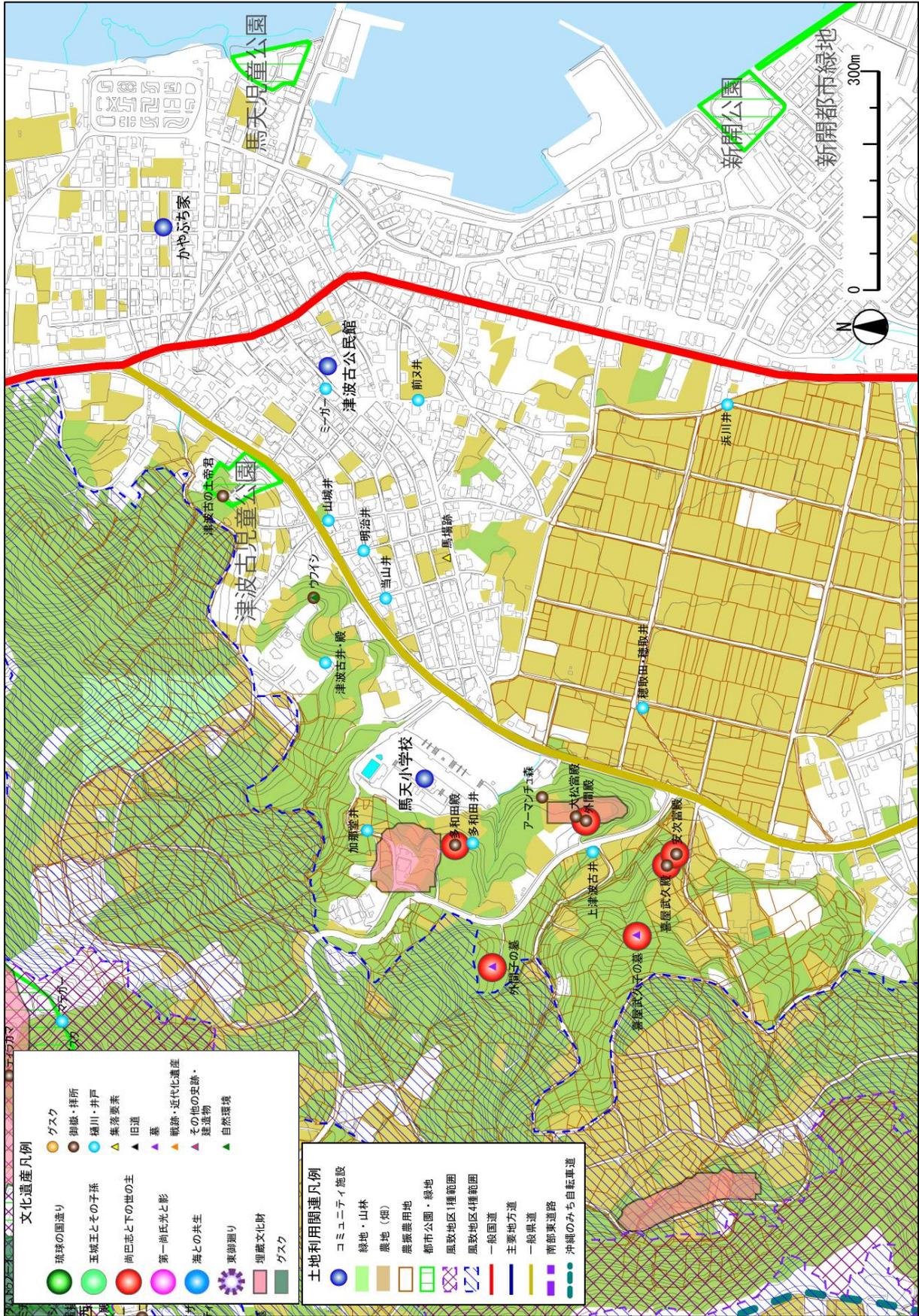
■獅子舞保存会、天人保存会、ミルク保存会

津波古の伝統芸能として、獅子舞、天人、ミルク保存会がそれぞれ組織されている。芸能技術の特殊さ等から継承者不足が課題だが、獅子舞については高校生を中心に担い手が集まりつつあり、今後の活動が期待されている。

オ)文化遺産保存・活用の課題

- 集落西側斜面を中心に集落の創設に関わる文化遺産が分布しており、伝承とともに特徴的な歴史文化環境が残されている。しかしながら、一部の行事での利用を除き、地域住民には文化遺産の存在は十分に周知されていない状況である。
- 伝統芸能の組織体制や意識は高いものの、天人や獅子舞等は技術・体力の両面から継承者不足が懸念されている。現在の取り組みに加え、文化遺産に関わるコミュニティの和を広げ、地域全体として文化遺産を継承していく体制づくりが必要である。
- 古くから発生した集落である一方、南城市の市街地拠点、生活・都市活動の場として活用が図られており、歴史文化資源や自然環境と一体となった雰囲気、都市としての風致の維持向上に積極的に活かされていない状況がみられる。

図 区域の現況図



2) 保存・活用の方針

津波古では、古くから継承された伝統芸能とともに、様々な地域活動が行われています。伝統芸能の代表は天人や棒術であり、このうち天人は五穀の種子を授ける伝承が地域の組踊として継承されたものです。一方、尚巴志の三山統一に由来する拝所も多く、また国王の行幸や御新下り、山原船の海上交通の要地として海との関わりもみられますが、これらはどちらかという忘れられた存在だといえます。

このような有形の文化遺産と伝統芸能のような無形の文化遺産をつないで、かつて行われていたような祭祀や行事の雰囲気まで含めた保存・活用に取り組むことが、津波古区域がめざす方向となります。特に南城市の市街地の拠点でもあり、周辺環境と調和した都市の風致の維持に文化遺産を位置づけることは大きな意義を持ちます。

■区域の歴史文化育成方針

①伝統芸能や祭祀が本来行われていた場を再生する。

- 伝統芸能に由来するアーマンチュ森はじめ、多和田殿、外間殿、喜屋武久殿など、集落西側の斜面緑地に分布する文化遺産の保全・文化財指定を図る。またこれらの緑地を保全し、ハンタ緑地と一体的な緑を形成する。
- 集落内の美化・修景による良好な住環境を保全するとともに、道ジュネーなどの際の拝所を結ぶ歴史的な道の環境整備を図る。
- 土帝君広場から馬天の浜（海）方面への眺望スポットを確保する。

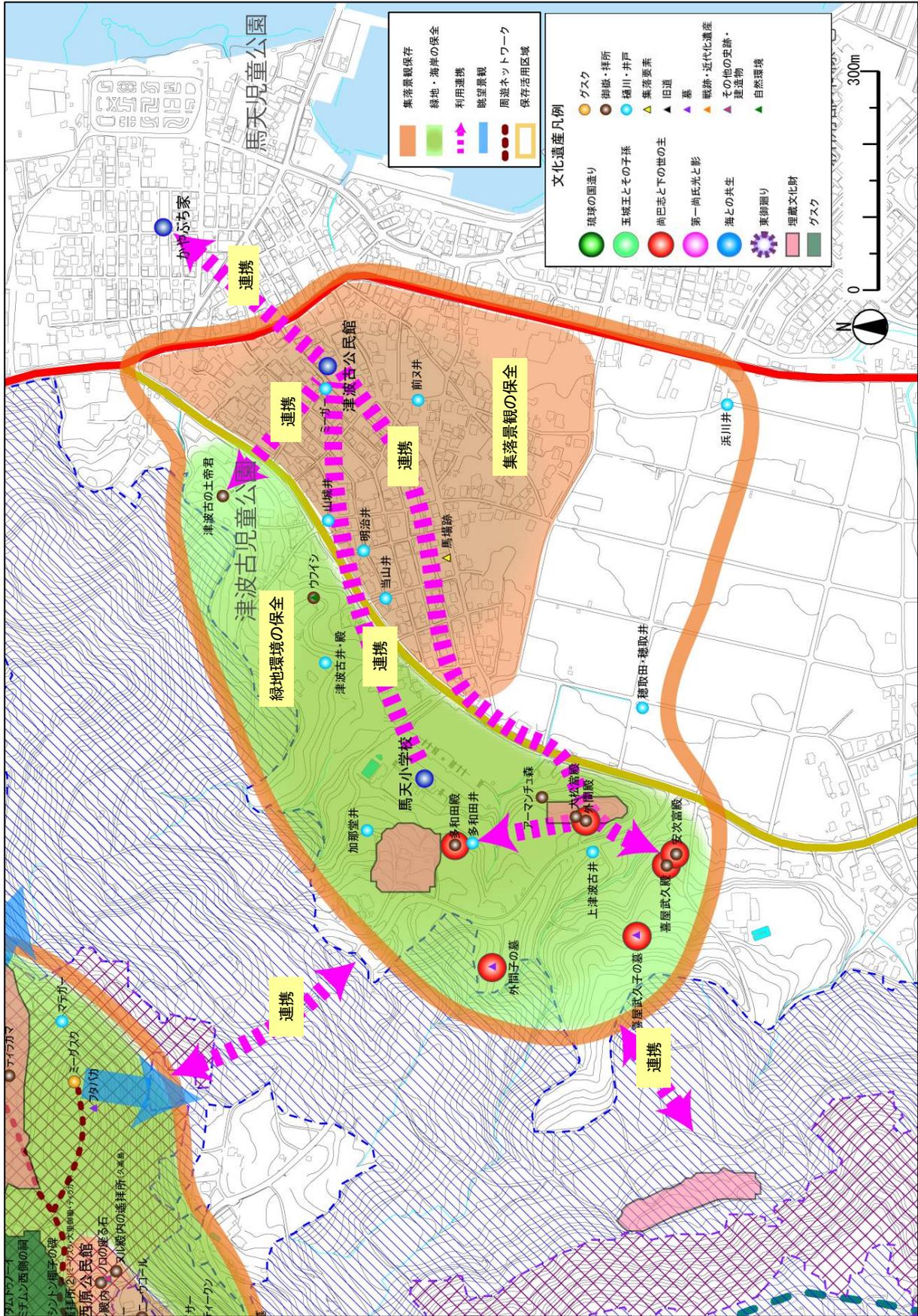
②地域内外と連携した取り組みを広げる。

- 国道331号の海側の地域とも連携して、文化遺産をモチーフとした地域活動を分かち合い、地域の一体感を醸成する。
- 隣接する大里西原の大里城跡及び関連文化遺産、佐敷小谷の歴史的集落景観と連携して、イベント・行事の共同開催、リレー開催などに取り組む。
- 馬天小学校の学校カリキュラム・行事とも連携して、子どもたちが興味を持つ文化遺産活用プログラムの企画開発を図る。

③伝統芸能を継承する人づくりの拠点化を図る。

- 青年会をはじめ芸能継承の活動が盛んなことから、県内の関係者を集めた伝統芸能ワークショップを開くなど、県レベルでの伝統芸能人材育成の拠点としての事業展開が可能なように支援する。
- 市内でも人口が多い地域であり、新旧の考え方がミックスされた文化的土壌を持つことから、新たな文化遺産活用のアイデアを募る会議やワークショップを開催するなど、伝統の枠を超えた人材を積極的に登用する。また、伝統芸能や文化遺産マネジメントの起業（NPO含む）を促す。

図 区域の構想図



(3) 島添大里グスク周辺保存活用区域プラン

1) 現状の整理

ア) 区域内の歴史文化資源の特徴

- 『絵図郷村帳』には「島添大里間切城村」とあり、島添大里グスクが成立した当時から集落が広がっていたと考えられる。『琉球国由来記』には「大里間切西原村」とみえる。1781年、集落が耕地・井泉に遠いことなどを理由に、阿多伊原に移動した。1903年、南風原村、平良村とともに大里村となった。
- 島添大里グスクは、「下の世の主」と称される島添大里按司によって築かれた（あるいは再興された）グスクで、東四間切を領有したとされる。その後大城グスクを攻め滅ぼしたが、尚巴志に攻められ討たれる。
- 島添大里グスクは東西200m、南北100m、面積3万平方メートル以上に達し、三山時代の主要なグスクの中でも大きく、島尻地域では一、二を争う規模を持つ。北側から西側にかけては急峻な崖が連なり、崖を背後に堅固な城壁と天然の地形を巧みに取り入れたグスクである。出土遺物には、土器やカムイヤキ・中国産陶磁器・日本産陶磁器・鉄器・石器・装飾品・古銭・自然遺物など多くの文物がみられ、その繁栄ぶりが窺える。グスク内には、ウティンチヂヤスクガー、スクナシガー、ウミチムン、ウタムトゥノイ、ウフウタキなどの井戸や拝所があり、グスクの東側には、島添大里グスクの物見台として使用されたミーグスクが存在する。現在、国指定文化財（史跡）に向けて準備を進めている。
- グスク周辺には、グスクの築城前に築かれたとされるギリムイグスク、グスク城門近くに築かれたチチンガー、島添大里按司の墓やその妹が眠るウミナイ墓、フタバカ、カニマン墓などの多くの史跡がある。集落内には井戸や拝泉の他、ウフユーやニーウコールといった拝所も存在する。また、かつてはグスクや集落を囲むようにチンマーサーが配されていたが、1つしか現存していない。
- 隣接する南風原集落には、鬼餅の由来に関わる大里鬼の住処があったとされ、それに由来して、島添大里グスクでは巨大ムーチー（鬼餅）を作る「うふざとヌムーチーさい」が毎年開催されている。また同イベントでは鬼餅伝承をもとにした創作劇「大里ウナー物語」が地域の有志により演じられている。

表 区域内の主な歴史文化資源

| 名称 | タイプ | 概要 |
|---------------------|-------|---|
| 島添大里グスク | グスク | 島添大里按司の居城とされるグスク。三山時代の主要グスクの中でも大きく、北側から西側にかけては急峻な崖が連なり、崖を背後に堅固な城壁と天然の地形を巧みに取り入れたグスクである。ヌル殿内や西原町の内間御殿とともに「西廻り」として巡る一行もある。 |
| ギリムイグスク (ギリムイ御嶽) | グスク | 島添大里グスクに移る前のグスクとされ、島添大里グスク近くの市道沿い南側の小高い森にある。島添大里グスク築城以前の玉村按司の居住地で、内部には古墓や拝所が点在している。 |
| ミーグスク | グスク | 島添大里グスクの出城で、中国貿易の際、馬天港を出入りする貿易船の歓送迎を島添大里按司が行った場所とされる。眼下には中城湾が広がり、周辺を見渡せる景勝の地に築かれている。 |
| チチンガー | 樋川・井戸 | 島添大里グスクの城門近くの城壁外に設けられた降り井形態の井戸で、西原集落の共同井戸として使用されていた。井戸の湧水地点は地表から8m下にあり、取水池までは琉球石灰岩の岩盤を削って43段の階段が取り付けられている。 |
| カニマン御嶽 | 御嶽・拝所 | 島添大里グスク以前の城主の関係者が祀られているとか、按司の家来で「金松」という人物が名前の由来ではないかともいわれているが、詳細は不明である。石灰岩の岩盤の上部に作られた拝所で、円筒形の祠上部に円形の屋根石が載せられ、頂部には宝珠が置かれている。 |

| 名称 | タイプ | 概要 |
|-------------|----------|---|
| 島添大里按司の墓 | 墓 | 島添大里グスクにある按司墓。崖下を利用した墓で、前面を琉球石灰岩を積み上げて塞いでいる。 |
| ウミナイ御墓 | 墓 | 島添大里按司の妹(ウミナイ)の墓だといわれている。崖下の窪みを利用した掘り込み式の墓で、前面を石灰岩で覆っている。 |
| フタバカ | 御嶽・拝所 | 岩が蓋をしたようにかぶさった形からそう呼ばれている。グスク時代に倉庫として使用されていたと伝えられるほか、グスク時代の避難所だったともいわれている。 |
| テイラガマ | 御嶽・拝所 | 崖下にあるガマで、グスク時代に島添大里按司に仕えていた僧侶の居住、または仕事場(住居はジャーシヌメー)だといわれている。戦時中は日本軍の壕として使用されていた。 |
| ウフウタキ | 御嶽・拝所 | 一の郭から下りてきた西側のコンクリート道路の中断部分に所在する墓である。斜面を掘り込み、周囲を石灰岩の石を積んで造られているが、現在はコンクリートで補修されている。先の島添大里グスクの城主(今帰仁系)もしくはその家来の墓ともいわれている。 |
| 大里間切番所跡 | 他の遺跡・建造物 | 大里間切番所の跡で、西原集落の西端に位置し、西原集落への入り口にさしかかる村道南風原・稲福線の西隣に位置する。付近一帯は畑や原野が広がっており、遺物の散布状況は把握できない。 |
| 大里御嶽 | 御嶽・拝所 | 年に一回、五月か六月のウマチーの際に拝みを行うことになっていたが、集落から遠いと理由で、現在は遥拝所からのウトウーシのみを行っている。コンクリート造の祠があり、周囲を石垣で囲い西側に入口を設けている。 |
| ヌル殿内 | 御嶽・拝所 | ノロの出る家に隣接してコンクリート造の神屋がある。内部には今帰仁按司・島添大里按司等を祀る位牌のほか、7つの香炉が置かれており、左側には火神が祀られている。島添大里グスク、西原の内間御殿などとともに「西廻り」として巡る一行もある。 |
| オキナワヒメウツギ群落 | 自然環境 | ユキノシタ科オオシマヒツギの変種で、日当たりのよい琉球石灰岩の岩壁に自生する。佐敷・大里にのみ生息が確認される貴重植物。 |

イ) 都市計画等の指定状況

- 旧大里村域は那覇広域都市計画区域に属しており、大里城址公園、大里内原公園が都市計画施設(公園・緑地)、その他の区域は市街化調整区域となっていたが、平成22年に南城市単独の都市計画区域として再編された。
- 島添大里グスクの史跡範囲及び周辺を平成22年に風致地区1種及び4種に指定。
- 大里城址公園北側及び大里間切番所跡周辺の農地が農用地区域(農振農用地)に指定。
- ギリムイ御嶽周辺が地すべり危険箇所に指定。

ウ) 文化遺産に関連する計画等

■「大里城址公園整備計画」(平成13年3月)

大里グスク一帯は、都市公園として整備するとともにレクリエーションゾーン構想の拠点とすることが平成4年に位置づけられた。平成12年度に一部見直しが行われ、グスクや集落景観を圧倒するような大型施設は整備対象外とし、グスクとその周辺の自然や歴史的資源を活かした体験型施設を充実する計画となっている。(詳細は別途整理)

■「東御廻いを活用した地域振興に関する調査」(平成7年3月)

東御廻り(アガリウマーイ)を沖縄の歴史・文化の学習の場として、また聖地巡礼の道として位置づけ、新たな観光資源として活用するための基本構想。大里は、②宿次の道コース、③グスク巡りコース、④尚

巴志ゆかりのコースに位置づけられている。(詳細は別途整理)

エ) 拠点施設・主なイベント・関連団体等

■大里内原公園

大里城址公園の北側にあるスポーツ施設。園内には陸上競技場兼野球場やテニス・コート、展望台などがある。

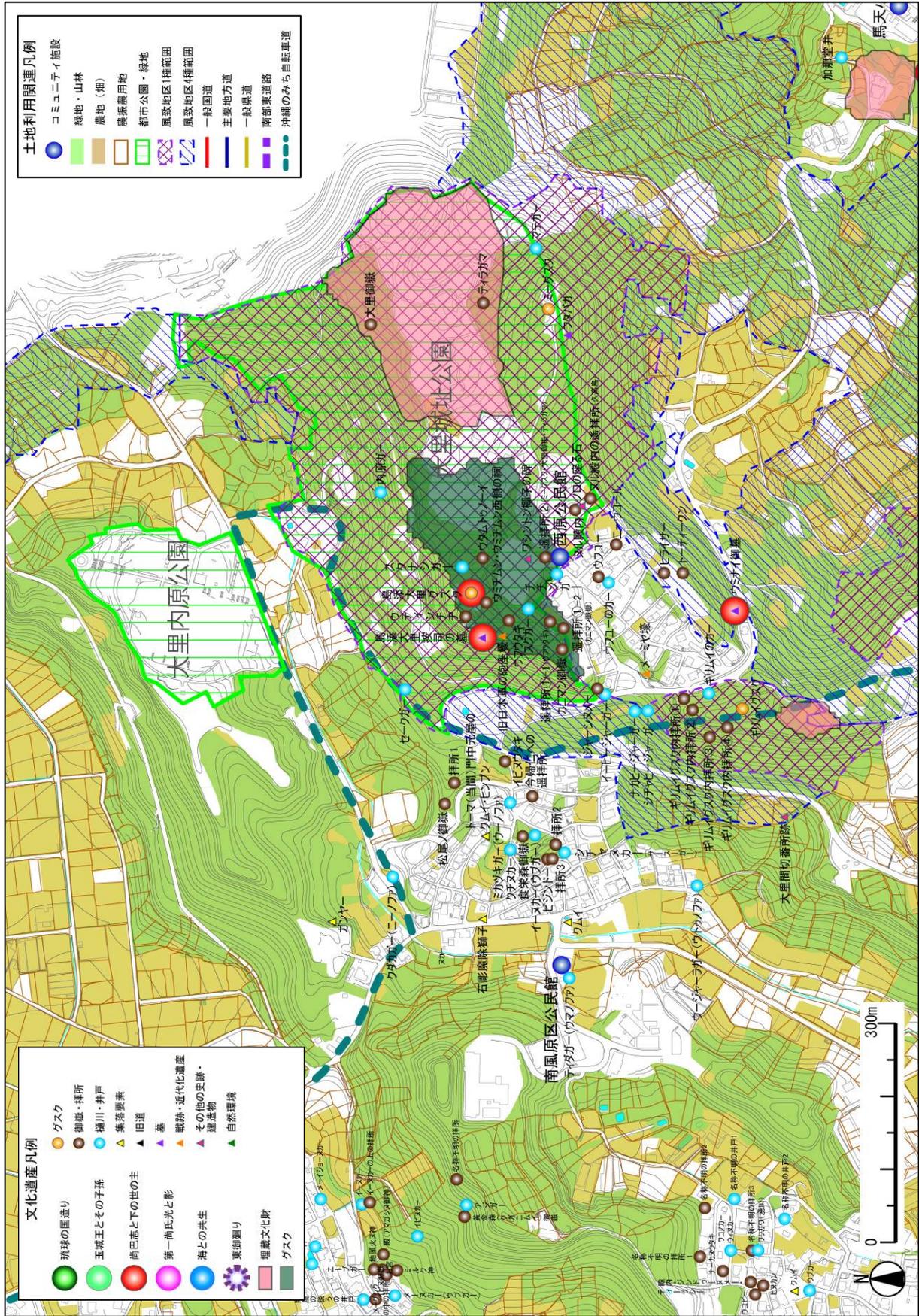
■大里西原地域活性化を考える会

大里西原地域住民の有志による組織。地域の伝統文化はじめ地域資源の発掘を通して地域の連帯を深め活性化を図る活動を行っている。

オ) 文化遺産保存・活用の課題

- 島添大里グスクは、現状ではアクセスや広大な内部空間の散策などの面で課題を抱えているが、周辺地域を含めた大里城址公園（都市公園）としての整備が計画されており、課題解決が期待される。関係各課との調整による整備推進を図る必要がある。
- 島添大里グスクは、旧大里村におけるレクリエーション拠点として位置づけられ、グスク祭などグスクを活用した賑わいの場をつくる活動が行われていたが、近年はグスクの活用機会が減少している。

図 区域の現況図



2) 保存・活用の方針

島添大里グスクは、三山時代に勢力を誇った島添大里按司のグスクであり、尚巴志によって滅ぼされた後も第一尚氏の支城となり、琉球王国成立へ至る動乱の頃をしのぶことができる遺跡です。一説では南山はこの地だとされるほど歴史的に重要で、中南部地域の主要なグスクを一望できるほど眺望に優れた場所に位置しています。

大里グスクは大里城址都市公園区域として位置づけられ、歴史文化資源を活用した公園整備が進められます。これと連動しながら、グスクと集落が一体となった立地特性を活かしたまちづくりを進めることが望まれます。南山の根城は島添大里グスクだったのかもしれないという郷土史家たちのロマンを地域で共有し、住民が歴史まちづくりに参画する仕組みを築いていきます。

■区域の歴史文化育成方針

①大里城址公園の史跡公園化を進める。

- 発掘調査の結果をふまえ、大里グスクの都市公園整備を促進する。島添大里グスクが歴史散策やレクリエーション活動などをおして地域の人々に愛され、地域コミュニティ育成の場としても活用されるような整備を図る。
- グスクとその周辺の自然環境や文化遺産を尊重し、公園内外で自然と歴史に配慮した景観を復元・形成する。グスク一帯はハンタ緑地との連続性を重視した緑地の保全を図り、グスクからの海への眺望、中南部への眺望を確保する。
- 島添大里グスクにアクセスする道路の修景整備、案内板・解説板の充実、集落内の緑化・美化など利用利便性の充実を図る。

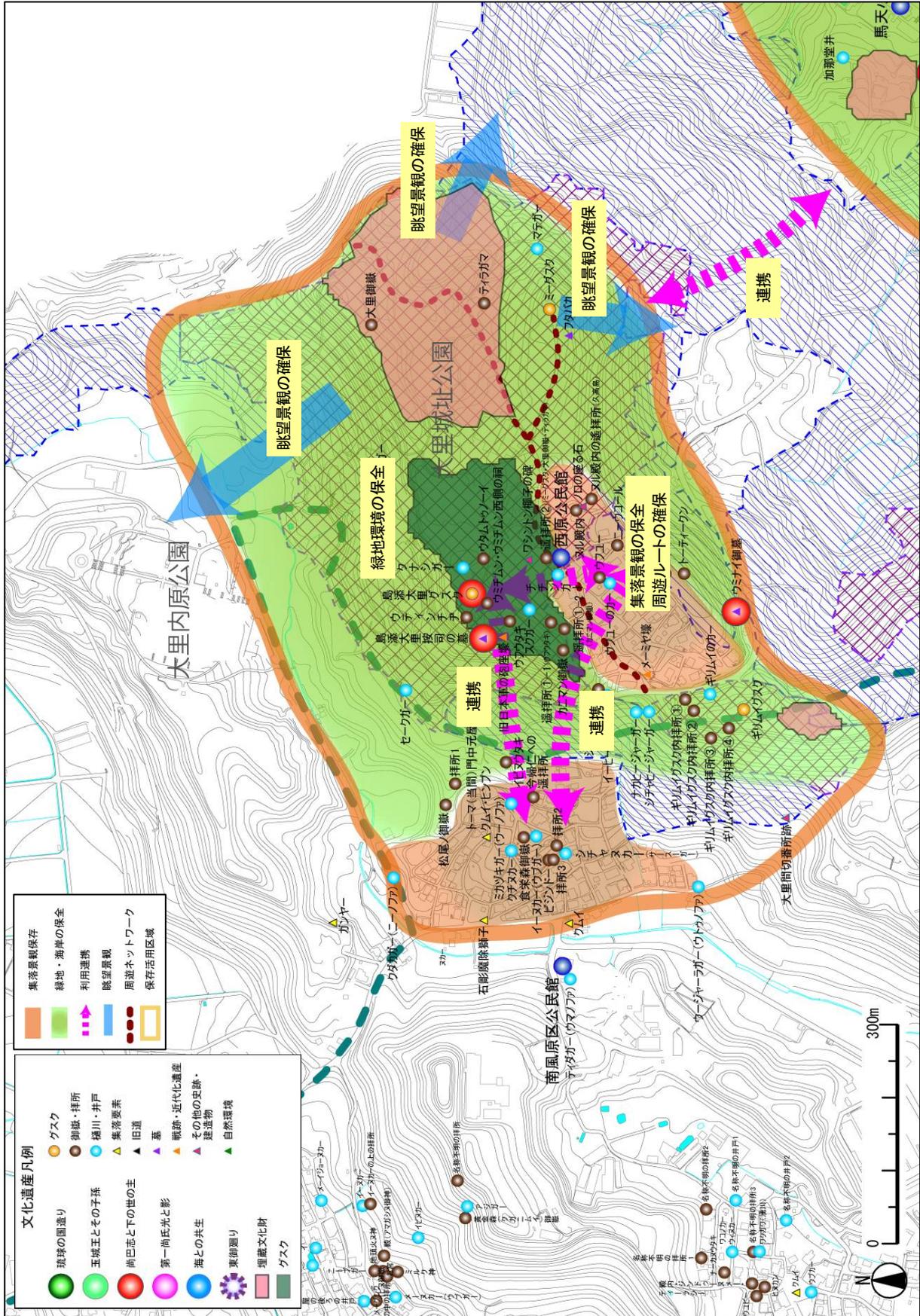
②西原と南風原の集落間の歴史文化ネットワークを強化する。

- 西原・南風原における赤瓦、石垣、植栽などの景観要素の充実を支援するなど、両集落が協力してグスクの一体的保全・活用に取り組めるような体制を構築する。
- グスク内及び周辺の文化遺産は、両集落の住民参加のもと清掃等の管理を行うとともに、地域活動の場として積極的に利用してもらうなど公園と地域との相互連携を図る。

③市民の歴史学習を支援する。

- 南山をテーマにした調査研究、学習活動の充実を図り、また関連するイベントや地域活動を充実して、周辺住民がグスクの末裔であることの誇りの醸成に努める。また、島添大里グスク案内ガイドなどボランティア体制の構築を図る。
- グスクと集落が一体化した環境づくりや地域活動に対して、南城市グスクまつりなどの形での表現の場を設け、関係する地域が互いに切磋琢磨できる環境を整える。

図 区域の構想図



(4) 大城グスク周辺保存活用区域プラン

1) 現状の整理

ア) 区域内の歴史文化資源の特徴

- 『おもろさうし』では「大きくすく」とみえる。『琉球国高究帳』には「玉城間切大城村」と、『琉球国由来記』には「大里間切大城村」とあり、玉城間切から大里間切へ間切替えがあったことがわかる。伝承では、玉城の大城大主が村立てをしたと伝わる。1903年、稲福村、真境名村を編入している。
- 大城グスクは、集落北側後方の標高143mの丘に立地しており、南側に城門を開き、北側の一段高くなったところに正殿跡がみられる。14世紀頃の城主は大城按司真武といわれ、島添大里按司によって滅ぼされた人物である。グスク内には集落で拝む多くの御願所がみられる。また大城按司の墓は別名ポーントゥ墓と呼ばれ、独特な形態から県指定文化財となっている。
- 島添大里按司に滅ぼされた大城按司の息子が敵を討つという大城独自の組踊「大城大軍」があり、1989年に復活上演された。また、年2回の大城綱曳きで上げられる4旗の旗頭は、全島旗頭コンクールで優勝するなどの実績を持っている。
- 隣接する稲福集落は、稲福遺跡などのグスク時代初期の遺跡が残る古い集落である。王国時代には大城ノロが両村を管轄しており、大城と稲福の両集落は歴史文化的関連性が深かった。

表 区域内の主な歴史文化資源

| 名称 | タイプ | 概要 |
|--------------|-------|---|
| 大城城跡 | グスク | 大城集落の北側後方の標高143mの丘陵上に築かれ、南側に城門を開き、北側に正殿跡がある。14世紀頃の城主は大城按司真武とされ、大城按司に由来する拝所や地名が残る。市指定文化財。 |
| 大城按司の墓 | 墓 | 14世紀中期～末期の大城グスク城主と伝えられる大城按司真武の墓。琉球石灰岩をくり抜いて玄室を作り、上部には丸く石を積んでいる。その形状から俗に「ポーントゥ墓」といわれる。県指定文化財。 |
| ユノーシ(大城之嶽) | 御嶽・拝所 | 石灰岩造りの御嶽と墓がある。大城按司が大城を治めるとき、サチガユーの人々に「イッターユーヤ、ノーシ(あなたたちの世は終わったから下がりなさい)」と言ったことから、この名がついたとされる。 |
| イーヌヘーリンツ | 御嶽・拝所 | 大城按司の二男の屋敷跡とされる。琉球石灰岩製の祠がある。 |
| シチャヌヘーリンツ | 御嶽・拝所 | 大城按司の三男の屋敷跡とされる。琉球石灰岩製の祠があり、香炉が1つ置かれている。 |
| アジガー | 樋川・井戸 | 大城按司が使用した井戸とされている。方形の掘りぬき井戸で、現在は水が枯れている。 |
| ウナザラの墓 | 墓 | 古墓群から南へ進んだ西側崖下に所在する。石灰岩の崖の岩陰を利用した掘り込み墓である。 |
| ムーチェのウタキ | 御嶽・拝所 | 「大城でまだ稲作が行われていなかった頃に鶴が1羽飛んできて、稲の穂を落とし、これが芽吹いて大城に稲作が始まった」という伝説が残る。コンクリート造の祠がある。 |
| ヌルドウンチ(大城之殿) | 御嶽・拝所 | ノロの屋敷跡である。終戦後に大城神社と呼ばれ、1984年にコンクリート製に改修。平成10年にヌルドウンチへ呼称を戻した。 |
| 上里の拝所 | 御嶽・拝所 | 村立ての家の1つである上里の屋敷跡であり、上里の神棚が残っている。 |
| 仲村渠の拝所 | 御嶽・拝所 | 大城の村立ての家の一つである仲村渠家の屋敷跡とされる。屋敷の中央奥にコンクリート製の社が建てられており、綱引きの際、綱を引く前に安全祈願を行う。 |

| 名称 | タイプ | 概要 |
|----------------|-------|---|
| タマガハルガー | 樋川・井戸 | 大城ノロが勾玉や紙を洗った井戸といわれている。現在井戸は埋められているが、大城集落の南端の畑の中に所在していたという。 |
| グシチガーまたはグシチャガー | 樋川・井戸 | 産湯や若水を汲みに行った井戸であるが、現在は利用されていない。大型円形の掘りぬき井戸である。 |
| 大城の綱曳 | 伝統祭祀 | 旧暦6月26日のアミシの御願と旧暦7月16日の翌日の年2回に開催。また10年に1度、支度綱が行われる。 |
| 大城の組踊(大城大軍) | 芸能 | 島添大里按司に滅ぼされた大城按司の息子が敵を討つという大城独自の組踊。 |

イ) 都市計画等の指定状況

- 旧大里村域が那覇広域都市計画区域の一部に属し、大城は市街化調整区域となっていたが、平成22年に南城市単独の都市計画区域として再編された。
- 大城グスクの史跡範囲及び周辺を平成22年に風致地区1種及び4種に指定。
- 大城グスク北側及び東側一帯の農地が農用地区域（農振農用地）に指定。
- 大城グスクの史跡範囲の一部が地すべり危険箇所指定。

ウ) 文化遺産に関連する計画等

■「大里村レクリエーションゾーン基本構想」(平成5年10月)

旧大里村で策定した計画で、大里東部の丘陵地帯（字大里、大城、字嶺井の一部）約190haを「レクリエーションゾーン」として位置づけており、大城城跡公園地区については、グスク内は石垣や井戸、拝所等を再現や休憩所・展望台を設ける程度の整備に留め、本丸以外はキャンプ場として使用すると位置づけられている。（詳細は別途整理）

■「東御廻いを活用した地域振興に関する調査」(平成7年3月)

東御廻り（アガリウマーイ）を沖縄の歴史・文化の学習の場として、また聖地巡礼の道として位置づけ、新たな観光資源として活用するための基本構想。大城は、②宿次の道コース、③グスク巡りコース、④尚巴志ゆかりのコースに位置づけられている。（詳細は別途整理）

エ) 拠点施設・主なイベント・関連団体等

■ウエルネスリゾート沖縄休暇センター

ホテル・レストラン・カフェ・宴会場・会議室・ユインチホール・展望大浴場・スポーツ施設等を備えた施設である。平和学習として本島南部を訪れる修学旅行等を受け入れている。

オ) 文化遺産保存・活用の課題

- 大城グスクは、大城按司に関わるグスクとして歴史的にも重視されているが、本格的な発掘調査はほとんど行われておらず、文化財的価値を正確に把握する調査が必要である。
- 大城グスクは集落の後方に位置する独立した小丘陵に形成されたグスクだが、集落からのアプローチという面ではやや利便性に欠ける。また、周辺が農地開発されるなど文化財保護の状況としては好ましくない面もみられる。

2) 保存・活用の方針

大城グスクは独立した丘陵に位置する景観が特徴的であり、大城集落の背後を護るように緑地を形成しています。集落はこのグスクを核として形成されたと考えられ、周辺一帯を含めて集落の成立に由来する歴史文化資源が分布しています。このようにグスクと集落の連星的な関係が大城グスクと大城集落には象徴的に見出すことができます。

このようなグスクとその影響下の集落との関係は南城市では確認しやすく、関連文化財群の分布をもってその関係を推し量ることが可能です。大城をモデルとして、地域住民がグスクとの強い結びつきを再確認できるような取り組み——例えば文化遺産の管理や保存・活用、伝承の掘り起こし、関連行事の開催などを支援することが必要だと考えられます。

■区域の歴史文化育成方針

①大城グスクの文化財・史跡としての魅力を向上する。

- 大城グスクの発掘調査などから学術的知見を収集・整理するとともに、石垣、井戸、拝所等の保存・修景整備を進め、大城グスクの文化財価値を高める。
- グスクを含めた丘陵全体を大城集落の聖域空間として、一体的な風致の維持を図る。
- 大城グスクにアクセスする道路の修景整備、案内板・解説板の充実など利用利便性の充実を図るとともに、集落からのアクセスルートについても適切な整備を図る。

②伝統的な祭祀、芸能活動等の継続・復興・創設を支援する。

- 大城集落の綱引きや旗頭は全県的にも有名であり、この資源を活用して住民の郷土意識や歴史学習意欲を高め、他の祭祀・芸能の再興や関連文化遺産の管理や運営への関心を盛り上げる。
- 大城按司真武はグスク時代の英雄として知られ、墓や関連遺跡が残されるほか、彼に由来する組踊が地域において上演されるなど地域のシンボルともいえる存在であり、この人物にまつわる行事等のイベント化・定期公演化に向けて支援する。

③稲福集落との散策ネットワークの形成を図る。

- 集落から離れている大城按司の墓や周辺の関連文化財群は区域の資源としての価値が高いことから、利用のネットワーク化を図る。
- その先に立地する稲福集落についても歴史的な関連性が強く、集落内の資源も豊富であることから、案内板・解説板の充実を含めて散策ルートの整備に努め、両集落が文化遺産の保存・活用で協調できるような体制づくりを図る。
- 将来的には、ウェルネスリゾート沖縄休暇センターとの利用連携（散策ルートの整備、歴史体験プログラムを提供など）を図ることを視野に入れる。

(5)テダ御川・知名グスク周辺保存活用区域プラン

1)現状の整理

ア)区域内の歴史文化資源の特徴

- 知名集落は『おもろさうし』に「ちにや」とみえ、『琉球国由来記』に「知名村」とある。廃藩置県以後には首里・那覇から士族が移住し6箇所の屋取集落ができ、そのうち1947年に久原、海野が独立した。
- 知名グスクは知名崎の南西部に位置する石灰岩からなるグスクで、テダ御川はその先にある拝泉である。テダ御川は、国王や聞得大君が久高島行幸の際に、この地で飲み水を補給し、航海安全を祈願したといわれ、後世の聞得大君の御新下りにおいても、知名崎仮屋が設置されており、知念への行幸時の休息地となっていた。現在でも東御廻りの聖地として拝まれている。
- 知名御川は知名集落の西側にあり、テダ御川と並ぶほど古いカー（井泉）と伝えられている。現在でも地元の人々に大切にされお参りされるほか、一部の人々には東御廻りの拝所としても拝まれている。
- ヌーバレーとは旧7月15日に行われる行事である。知名のヌーバレーは市内最大規模の祭りで、道ジュネーから始まり、夕方からはアシビナーの特設ステージで芸能が催される。蝶にふんした青年が踊る「胡蝶の舞」は知名独特の踊りである。

表 区域内の主な歴史文化資源

| 名称 | タイプ | 概要 |
|------------|------------|--|
| テダ御川 | 樋川・井戸 | 琉球国王が久高島を参拝する際、この湧水を飲み休息したといわれる。現在でも東御廻りの巡礼地となっている。市指定史跡。 |
| 知名グスク | グスク | テダ御川近くの岬南西部にあり、尚真王が行幸の休憩所として宿舎を構えさせたと伝わる。 |
| 須久名嶽 | 御嶽・拝所 | 『おもろさうし』や『琉球国由来記』にも登場する知名の御嶽。 |
| 稲嶺嶽・稲嶺之殿 | 御嶽・拝所 | 『琉球国由来記』に登場する拝所で、知名の南側高台に位置する。東御廻りでここを拝む門中もある。 |
| 与那嶺殿(根所火神) | 御嶽・拝所 | 知名の根所とされる与那嶺家の殿であり、根所火神が祀られている。 |
| 知名嶽 | 御嶽・拝所 | ノロ殿内の近くに所在し、ハマサンゴ石でできた祠がある。 |
| 知名殿(ハンタドン) | 御嶽・拝所 | 知名集落の祭祀場で、戦前まではウマチーの際に、搗き臼の周りを鞍がけした馬が3回廻す儀礼が行なわれていた他、ノロたちが他の拝所を拝んだ後、この殿に集まり儀礼が行なわれていた。 |
| 仲村渠之殿 | 御嶽・拝所 | 仲村渠門中の祭祀場であったと考えられ、『琉球国由来記』にも登場する。現在は関係者が祭祀を行なっている。 |
| 知名御川 | 樋川・井戸 | テダ御川と同じくらい古いカーと伝えられる。終戦後まで周辺地区の共同水道・簡易水道の水源として使用されていた。現在でもハチウビーを始め東御廻りの巡礼地として拝まれている。市指定史跡。 |
| 知名のヌーバレー | 伝統祭祀 芸能 | 旧暦7月15日に行われる伝統祭祀。長者の大主を先頭に道ジュネーを行ない、集落内の各拝所で芸能を奉納する。道ジュネー後には、農村公園の特設舞台上で夜通し舞踊や歌が披露される。 |

イ) 都市計画等の指定状況

- 旧知念村域は都市計画区域外であったが、平成22年に南城市単独の都市計画区域として再編された。
- テダ御川の史跡範囲及び知名グスクの史跡範囲を平成22年に風致地区4種に指定。
- 知名グスク南側一帯の農地が農用地区域（農振農用地）に指定。
- 知名集落西側斜面が地すべり危険箇所指定。

ウ) 文化遺産に関連する計画等

■「東御廻いを活用した地域振興に関する調査」(平成7年3月)

東御廻り(アガリウマーイ)を沖縄の歴史・文化の学習の場として、また聖地巡礼の道として位置づけ、新たな観光資源として活用するための基本構想。知名は、①東御廻りコース、⑤アミキヨ伝承のコースに位置づけられている。(詳細は別途整理)

エ) 拠点施設・主なイベント・関連団体等

■海野漁港(知念漁業共同組合)

知念地区の漁港であり、知念漁業共同組合による鮮魚販売所もある。漁港では毎年5月4日にハーリーが行われる。

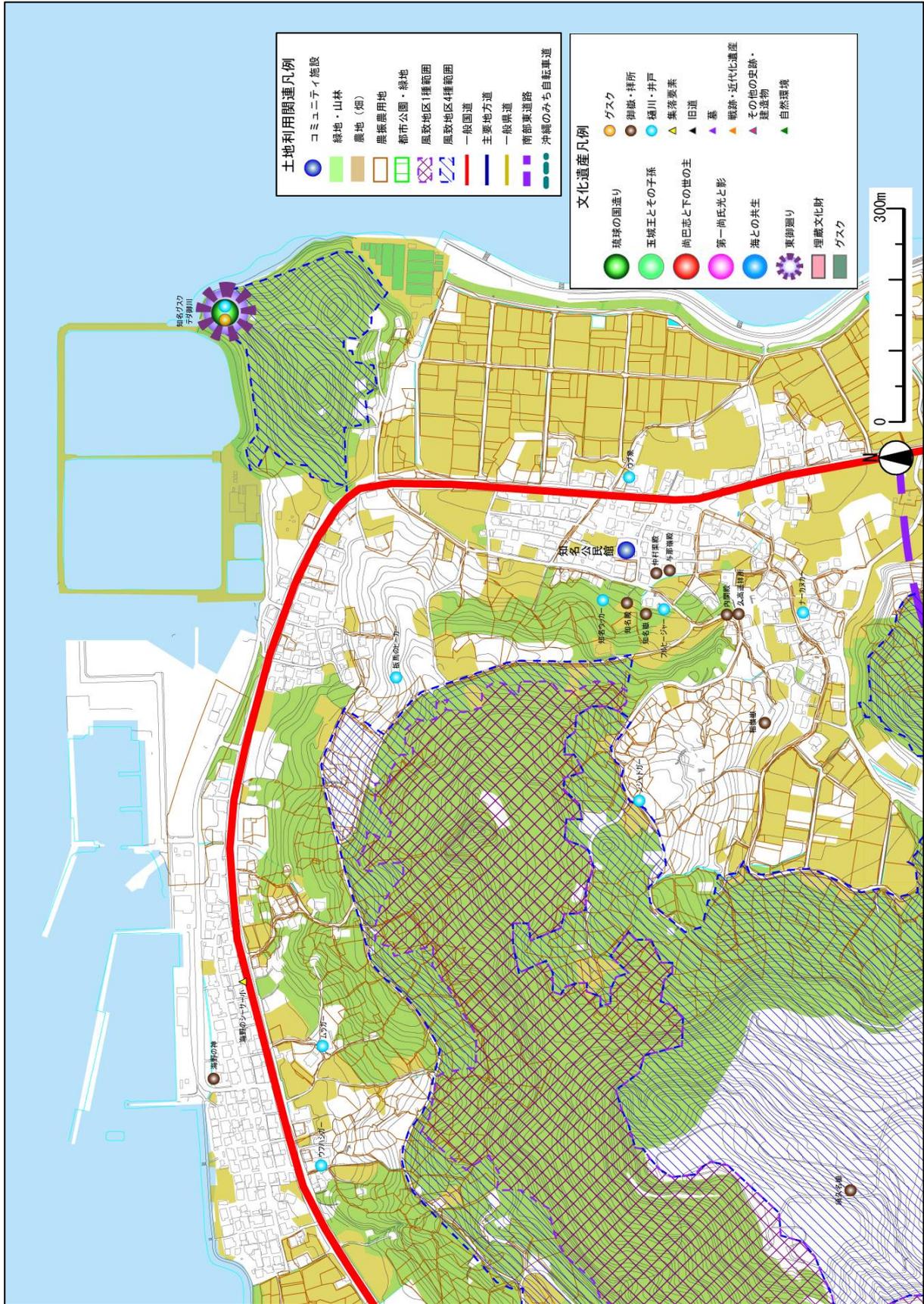
■知念文化財案内講師友の会

斎場御獄や知念城跡、久高島など南城市知念の文化財ガイドの組織である。斎場御獄内の施設「緑の館」に常駐している。

オ) 文化遺産保存・活用の課題

- 知名グスクは、国王の行幸に関わる史跡として歴史的にも重視されているが、本格的な発掘調査はほとんど行われておらず、文化財的価値を正確に把握する調査が必要である。
- 知名グスク一帯は小高い丘陵地を形成し、テダ御川前面の海岸は隆起珊瑚礁植生が発達しており、自然景観としての保全度も高いため一帯の森林や海岸線の保存が必要とみなされ、第4種の風致地区に指定された。
- テダ御川、知名御川は東御廻りの拝所として多くの参拝客が訪れるため、誘導板などの参拝や周遊の利便性を高める必要がある。

図 区域の現況図



2) 保存・活用の方針

テダ御川は、琉球国王の行幸の際に休憩地であり、久高島への航海安全を祈願した地といわれ、現在でも「東御廻り」の聖地として拝まれています。「テダ」とは太陽、すなわち国王や東方を象徴する言葉です。テダ御川を取り囲む知名グスクの緑の小高い丘陵地は、古くは東方（久高島）を往復する海からの目印としても重要な場所だったと考えられます。

一方、知名のヌーバレーは、地域の安寧と五穀豊穡を祈願し、無縁仏をあの世へ帰す神事であるとともに、地域に伝わる多彩な伝統芸能を楽しむ行事として、地域だけでなく、市外からも多くの見学者が訪れ、集落は活気にあふれます。

このような聖地巡拝や伝統行事を通じて、有形の文化遺産と人々の活動を結びつけながら、伝統行事だけでなく、その背景となる物語やその意義までを保存・活用に取り組むことが必要だと考えられます。

■区域の歴史文化育成方針

①テダ御川、知名グスクの文化財・史跡としての魅力を向上する。

- テダ御川及び知名グスクにおける発掘調査などから学術的知見を収集・整理するとともに、拝所等の修景整備を進め、文化財としての価値を高める。
- テダ御川、知名グスクを含めた丘陵全体を、東御廻りの重要な聖域空間として、一体的な風致の維持を図る。
- 国道からテダ御川にアクセスする遊歩道の整備、案内板・解説板の充実など利用利便性の充実を図る。

②テダ御川と知名集落等のネットワークを密にする。

- 知名御川などの集落内の文化遺産や周辺の美化・修景により、良好な住環境を保全するとともに、道ジュネーなどの際の拝所を巡る歴史的な道の環境整備を図る。
- テダ御川と知名集落とのネットワークの形成を図る。

③伝統的な祭祀、芸能活動等を通じた人づくり、交流拠点化を図る。

- 青年会をはじめ、多彩な伝統芸能を演じる人材や団体が豊富なことから、県内の芸能公演への積極的な参加や他地域との交流を図る。
- 知名をはじめ、安座真、久手堅、志喜屋などの知念地区のヌーバレーが開催されている地域を中心に伝統芸能のネットワーク化、イベント連携などを図る。

(6) 斎場御嶽周辺保存活用区域プラン

1) 現状の整理

ア) 区域内の歴史文化資源の特徴

- 『おもろさうし』では「くてけん」とみえる。『琉球国高究帳』では「くでけん村」と記されている。『琉球国由来記』には久手堅村内に佐宇次根所などがサウスノロの祭祀としてであると記載されており、さうす村は久手堅村の一部となっていたようだが年代は不明である。
- 斎場御嶽は琉球開びやく神話にもあらわれる琉球王国最高の聖地であり、第一尚氏の頃より国王の行幸が行われていたが、1673年からは代理での参拝となった。聞得大君の即位式である御新下りの儀式は引き続き行われた。これらをモチーフにした巡礼が東御廻りとして現在に伝えられている。
- 斎場御嶽の内部には6つのイビ（神域）が存在するが、なかでも大庫理、寄満、三庫理は、首里城内の建物や部屋と共通する名前を持ち、関連性が深かったと考えられている。大庫理は御新下りが行われた場所、三庫理は三角岩の突き当たりの空間で、発掘調査では金製勾玉や青磁器・銭貨が出土した。御嶽一帯は植物群落や野生動物も非常に多く、聖域背後の斜面と尾根一帯の緑地は聖域空間の尊厳性を守る空間として重要な場所である。
- 旧7月16日に行われる久手堅ヌーバレーは、知名・安座真とともに長い間続く伝統行事であり、近年、組踊「鏡の割」も復活上演されている。
- 1892年に知念尋常小学校が、1907年に間切番所が知念から移転してからは、久手堅は間切の中心地となった。1908年には当地にあったイーフトウ屋取集落が佐敷村屋比久の一部になり、1947年には富貴利屋取が吉富として独立した。集落内には火難を避けるために石獅子が3つ配されていたが、1つしか現存していない。

表 区域内の主な歴史文化資源

| 名称 | タイプ | 概要 |
|--------------|----------|--|
| 斎場御嶽 | 御嶽・拝所 | 沖縄最高の聖地であり、アマミキヨがつくった七御嶽の一つ。国王・聞得大君の行幸や、聞得大君の就任儀式「御新下り」が行われた。平成12年に世界遺産に登録された。 |
| 沖縄県斎場御嶽出土品 | 埋蔵文化財 | 三庫理から出土した金製勾玉や中国青磁器・銭貨などで、中世～近世の信仰を考えるうえで極めて貴重な資料である。国指定重要文化財(考古資料)である。 |
| ウロー泉(カー) | 樋川・井戸 | 斎場御嶽への参道途中にあるカー。崖下の湧水から樋で水を引き、琉球石灰岩の切石で造られた水槽にためていたようだが、現在水は枯れている。近くにはウローカー砲台跡が残る。 |
| キナグナーワンダーグスク | グスク | 斎場御嶽西方約200mの所にある。高さ7～8m位のキノコ状の岩で、その頂上からは土器片が採集されている。 |
| キナグナーワンダー遺跡 | グスク | キナグナーワンダーと呼ばれる屹立した岩に隣接しグスクが築かれている。保存状態はきわめて良好で、城壁の石垣が残っている。 |
| 當間殿 | 御嶽・拝所 | 斎場御嶽の近くにあり、公儀の祈願があった拝所である。庭も合わせて約100坪の敷地で、庭にはクバやフクギなどの大木が生い茂っている。 |
| 當間のヒヤー | 御嶽・拝所 | 當間殿の右後方の山。字久手堅の人々を守護する神様が鎮座しているといわれている。 |
| ポーザー石 | 他の遺跡・建造物 | ノロが馬に乗る際、踏み台にした石といわれる自然石が當間殿前に残されている。 |
| 久手堅の大アカギ | 自然環境 | 百数十年前に首里城改修時に切り倒され、献木された。その後、切り株から芽を出した3本の樹幹が現在の形をつくっている。市指定文化財。 |

| 名称 | タイプ | 概要 |
|-----------|------|--|
| 久手堅のヌーパレー | 伝統祭祀 | 旧盆明け7月16日の行事。棒術、ウスデーク、踊り、組踊などが行われる。 |
| ウフグスク | グスク | 標高高70mの小高い丘に位置している。吉岡隊陣地壕(ウフグスク軍陣地壕跡)がある。近年土地造成工事で破壊された。 |

イ) 都市計画等の指定状況

- 旧知念村域は都市計画区域外であったが、平成22年に南城市単独の都市計画区域として再編された。
- 斎場御嶽の資産範囲(4.5ha)を取り巻く緩衝地帯(12.1ha)は、南城市土保全条例に基づく「歴史的文化的景観保護地区」に指定されている。また、平成22年に斎場御嶽及び周辺を風致地区1種に指定。
- 斎場御嶽の南側の農地が農用地区域(農振農用地)に指定。
- 斎場御嶽周辺が急傾斜地崩壊危険箇所及び地すべり危険箇所に指定。

ウ) 文化遺産に関連する計画等

■「知念城跡・斎場御嶽及び周辺整備基本構想・基本計画」(平成5年3月)

旧知念村で策定された計画で、「(仮称)朝陽の里道構想」として、斎場御嶽と知念城跡をその中心に位置づけた保存・整備計画である。斎場御嶽の尊厳性を高めるために、中心部分を包囲する歴史的環境の確保、久手堅集落方面から斎場御嶽に至る御新下りのルート等の再現が計画されている。(詳細は別途整理)

■「東御廻いを活用した地域振興に関する調査」(平成7年3月)

東御廻り(アガリウマーイ)を沖縄の歴史・文化の学習の場として、また聖地巡礼の道として位置づけ、新たな観光資源として活用するための基本構想。久手堅は、①東御廻りコース、⑤アマミキヨ伝承コースに位置づけられている。(詳細は別途整理)

エ) 拠点施設・主なイベント・関連団体等

■緑の館・セーファ

南城市の歴史体験学習施設。斎場御嶽や南城市の歴史に関する展示コーナーがあり、券売所を兼ねている。知念文化財案内講師友の会が常駐しており、案内も依頼できる。

■がんじゅう駅南城

南城市の魅力を活かした様々なプログラムや市民との交流の場や観光情報を提供している。南城ツーリズム(体験滞在交流型観光)の拠点として、地元ならではの観光案内を行う。農業、漁業、伝統文化、歴史、自然など、各分野のプロである地元民がサポート役として観光人材バンクの登録制度がある。

■知念文化財案内講師友の会

斎場御嶽や知念城跡、久高島など南城市知念の文化財ガイドを有料で実施する組織で、斎場御嶽内施設「緑の館」に常駐している。

オ) 文化遺産保存・活用の課題

- 斎場御嶽は平成12年の世界遺産登録以降、観光目的の参拝者が急激に増加しており、資源の劣化や自然

環境の改変が危惧されている。

- 史跡周辺の緩衝地帯は齋場御嶽に関わりの深い文化遺産が分布しているが、未整備・未活用の状況である。
- 久手堅集落は、かつては齋場御嶽と深い係わりがあったが、現在の参道と集落の立地の関係上、地域住民が齋場御嶽と関わる機会は多くない状況にある。

図 区域の現況図



2) 保存・活用の方針

世界遺産に登録されている斎場御嶽は、琉球開びやく神話にも現れ、聞得大君の就任儀礼（御新下り）などが行われた琉球王国最高の聖域です。現在も礼拝や信仰の対象として多くの参拝者が訪れており、琉球の信仰世界を語る上で重要な資源だと位置づけられます。そのお膝もとの久手堅集落は長らく知念村の中心として役場などが配置され、現在も小・中学校、中央公民館、図書館、体育センター、福祉センターなど公共機能がおかれ、地域活動を行うのに利便性が高い地域です。集落内に点在する関連文化財群を斎場御嶽と連携させ、地域活動を盛り上げていくことが望まれます。

■区域の歴史文化育成方針

①斎場御嶽とその周辺の利用連携(分散)を図り、資源の劣化を食い止める。

- 世界遺産に指定されたことで斎場御嶽の参拝者が増えたため、資源の劣化や環境の悪化などが危惧される状況となっており、ルールづくりも含めた適切な利用管理を強化する。
- 緩衝地帯には、御新下りの旧道筋やウロー泉など、斎場御嶽と歴史的に関係の深い関連文化遺産があり、斎場御嶽と一体となった歴史的環境の保全を図るとともに、これらの利活用を進めて斎場御嶽への利用過多を分散する。
- 「斎場御嶽周辺整備基本計画」で位置づけられた環境整備の具体化に加え、斎場御嶽に至る歴史的道筋として、久手堅集落方面から当地に至る御新下りの道などのルートの再現を図る。久手堅集落内においても、石垣、道筋、井戸などの歴史的環境を保全し、沿線景観整備、サイン整備を図り、斎場御嶽から集落への散策等の利便性を高める。
- 隣接する安座真区からの航路と連携して、久高島の文化遺産との周遊ネットワークを築く。

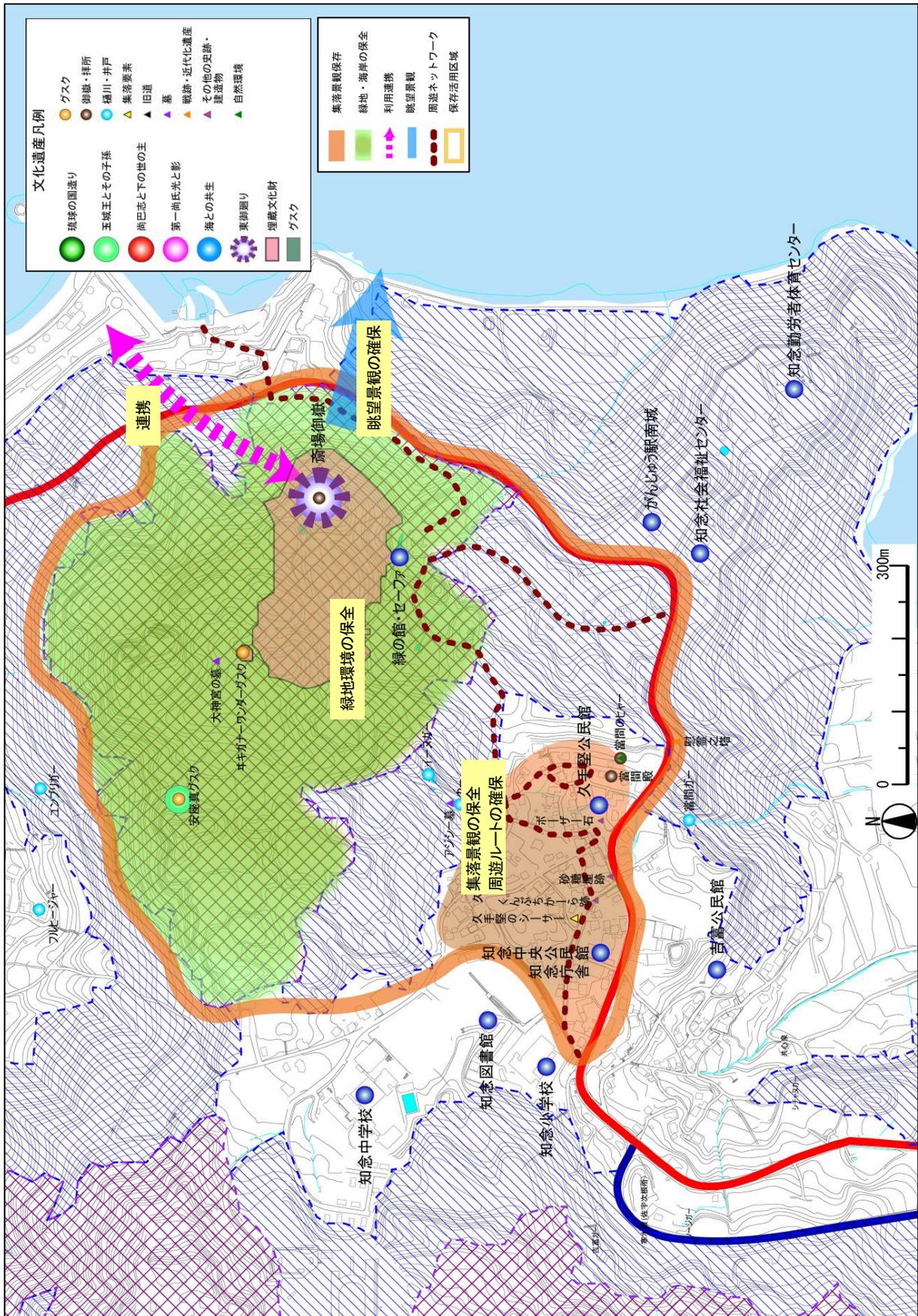
②ビューポイントの確保、周辺の景観の維持・向上を図る。

- 斎場御嶽の資産範囲(4.5ha)を取り巻く緩衝地帯(12.1ha)は、「南城市市土保全条例」に基づく「歴史的文化的景観保護地区」に指定されており、この位置づけに沿った施策を講じるとともに、新たな都市計画の風致地区の規制等を徹底して、緑豊かな景観の維持・向上に努める。
- 斎場御嶽から見える久高島への眺望は、重要な観光資源であるばかりでなく歴史的観点からも重要であり、一帯の風致の維持を図る。

③文化遺産を活用した市民活動・地域活動を進める。

- 斎場御嶽を訪れる観光客をターゲットにして、文化遺産ガイドンスや歴史体験などを行う活動を促進するとともに、それらの活動に地域住民が関われる仕組みを構築するなど、地域住民が斎場御嶽を利活用する機会をつくることにより、ハード・ソフト両面での一体的な魅力向上を図る。
- 地域の伝統芸能活動、市民の文化活動などに文化遺産の場を提供し、住民・市民が文化遺産を身近に感じる機会を増やす。

図 区域の構造図



(7) 知念グスク周辺保存活用区域プラン

1) 現状の整理

ア) 区域内の歴史文化資源の特徴

- 『おもろさうし』に「ちへねん」などとみえ、『絵図郷村帳』にも「知念」と記述される。知念大川の嶽の南にできた知念村と、神山嶽の東斜面にできた波田真ムラがあり、次第に統合されて知念集落が形成された。波田真村の名残として、集落の東側に波田真殿がある。また、1945年に字具志堅が分離独立した。
- 知念グスクは、『おもろさうし』に「ちへねんもり」などと表記され、「神降れ初めのぐすく」などと歌われた開びやく神話に由来するグスクである。城壁は山石の野面積みによる古い城壁（古城）と、拱門のある切石あいかた積み（新城）からなる2つの郭からできている。南西側は崖地になっており、眺望が良く、グスク内部には友利之嶽、火の神などがある。城壁外側には知念ノロ屋敷跡として屋敷の石積みが残されている。
- 隣接する関連文化遺産に、グスクの立地と関連性の深いウファカルや知念按司の墓がある。ウファカルは、アマミキヨが天から稲を持ち返りこの地に植えたという稲作発祥の地と伝えられ、湧き出る水が知念大川に続いており、その側には拝所としての殿が残っている。知念按司の墓は、琉球石灰岩の崖下にある掘り込み墓で、墓内には石棺が安置されており、知念按司とその家族が葬られているといわれ、その規模や残存状況なども考古学的にも大変貴重なものである。
- 知念グスク及び知念大川は国王の行幸でも拝まれた場所であり、現在も東御廻りの巡拝者が訪れる。
- 1761年に知念間切の主邑として知念グスクに間切番所が置かれ、1897年に久手堅に役場ができるまで続いた。グスクの表門の石段を下るとノロ屋敷跡などの城下町の石積み跡が残っている。
- サキシマスオウノキやフクギ群など天然記念物が多く、またウファカルや知念大川などを水源とするカーや樋川といった文化遺産が多数分布している。

表 区域内の主な歴史文化資源

| 名称 | タイプ | 概要 |
|-------------|-------|---|
| 知念城跡 | グスク | 自然石を積んだ古城と、アーチ門を備えた切石積みの新城の二つの郭からなっている。神がはじめて天降りしたグスクとされ、国王・間得大君の行幸が行われた。城内の友利の嶽が東御廻りの拝所になっている。国指定史跡。 |
| ノロ屋敷跡 | 御嶽・拝所 | 知念城跡近くに所在するノロの屋敷跡。石積み、フクギの屋敷林などが残っており、香炉が置かれている。 |
| 古屋敷跡 | 御嶽・拝所 | 知念城跡近くに所在する古屋敷跡。石垣の中に琉球石灰岩の切石を積んだ祠があり、香炉が置かれている。 |
| 知念按司の墓 | 墓 | 知念城跡の北西、崖下にある自然岩の掘り込み墓。墓室内には石棺と荒焼の厨子甕が数点あるといわれている。市指定史跡。 |
| ウファカル(ウカハル) | 生産技術 | 知念大川の後ろの山にあり、稲発祥の伝説がある。湧水の前に小さな水田がある。水田にはシリケンイモリ等が生息している。 |
| 知念大川 | 樋川・井戸 | 城跡の西側裏門から約100mの所に所在するカー。2つの湧水があり、石積みとされその上方が拝所である。稲作発祥のウファカルとの関係で、稲のミシキヨマで国王・間得大君の行幸が行われた。 |
| 知念大川の殿 | 御嶽・拝所 | 知念城に付随するカーの後にある殿。石が2つ敷かれており、奥の方の石には粟石製の方形香炉が1つ、手前の石には粟石製の方形香炉3つ、コンクリート製の方形香炉1つが置かれている。 |

| 名称 | タイプ | 概要 |
|--------------|-------|--|
| 神山の殿 | 御嶽・拝所 | 『琉球国由来記』に波田真村の御嶽とされ、五月、六月のウマチーで拝まれた。琉球石灰岩の柱が4本残っており、柱はやや南東側に傾いている。周囲には石積みが残っている。市指定文化財。 |
| 知念大屋の神屋 | 御嶽・拝所 | 約4坪のコンクリート造の神屋で、内部には火の神や知念ノロの香炉、知念按司の香炉、神人の香炉などが祀られている。東向き。 |
| 波田真殿 | 御嶽・拝所 | コンクリート造の祠で、モクマオウに囲まれている。内部には方形の香炉がある。二月ウマチー、ミシキヨマ、五月・六月ンチャタカビ、五月・六月ウマチー、アミシヌ御願、タナバタの際に拝みを行う。 |
| 川溝殿 | 御嶽・拝所 | 南風原町与那覇に元屋がある稲福門中(川溝家)の拝所。コンクリート造の神屋で、赤煉瓦で屋根を葺いている。内部には陶器製の青い円形香炉5つ、白い円形香炉1つが置かれている。 |
| クベーマガー | 樋川・井戸 | クビヤマのウブガーとも呼ばれる。久美山部落は飲み水をこのウブガーから汲んでいた。道路と民家の間にあり、コンクリート製の階段で下りるようになっている。香炉が1つ置かれている。 |
| ポーズガー(坊主井) | 樋川・井戸 | 仲里常延氏の祖先が久手堅親雲上政常を助けるために、庭に掘った井戸とされる。 |
| 知念のシーサー | 集落要素 | 城跡へと続く道沿いにある琉球石灰岩製の石獅子で、集落を守る役目を果たしている。高さ85cm。風貌がよく似ていることから、具志堅のシーサーと同時期につくられたものと推測される。 |
| 知念の大綱曳き | 伝統祭祀 | 旧暦6月25日に行われるカシチー綱。平成20年に45年ぶりに開催された。 |
| 新屋のサキシマスオウノキ | 自然環境 | ノロの家の庭に植えられている。旧知念村の天然記念物に指定されている3本のサキシマスオウノキのうち1本で、3本のなかでも一番古いものだといわれている。 |
| 知念親川のフクギ群 | 自然環境 | 仲里家の屋敷及び、屋敷のすぐ東側にフクギが生えている。大小数十本のフクギ群のうち、樹齢250年以上と思われる15本が市指定文化財。 |

イ) 都市計画等の指定状況

- 旧知念村域は都市計画区域外であったが、平成22年に南城市単独の都市計画区域として再編された。
- 知念グスクの史跡範囲及び周辺を、平成22年に風致地区1種及び4種に指定。
- 知念グスク西側から海岸に至る農地が農用地区域（農振農用地）に指定。
- 知念按司の墓及び知念グスク史跡範囲の一部が地すべり危険箇所に指定。

ウ) 文化遺産に関連する計画等

■「知念城跡・斎場御嶽及び周辺整備基本構想・基本計画」(平成5年3月)

旧知念村で策定された計画で、「(仮称) 朝陽の里道構想」として、斎場御嶽と知念城跡をその中心に位置づけた保存・整備計画である。知念グスクの整備や周辺環境の地形や祭祀空間の保存、歴史的道筋の再現などが検討されている。(詳細は別途整理)

■「東御廻いを活用した地域振興に関する調査」(平成7年3月)

東御廻り(アガリウマーイ)を沖縄の歴史・文化の学習の場として、また聖地巡礼の道として位置づけ、新たな観光資源として活用するための基本構想。知念は、①東御廻りコース、②宿次のみちコース、③グスク巡りコース、⑤アマミキヨ伝承コースに位置づけられている。(詳細は別途整理)

エ) 拠点施設・主なイベント・関連団体等

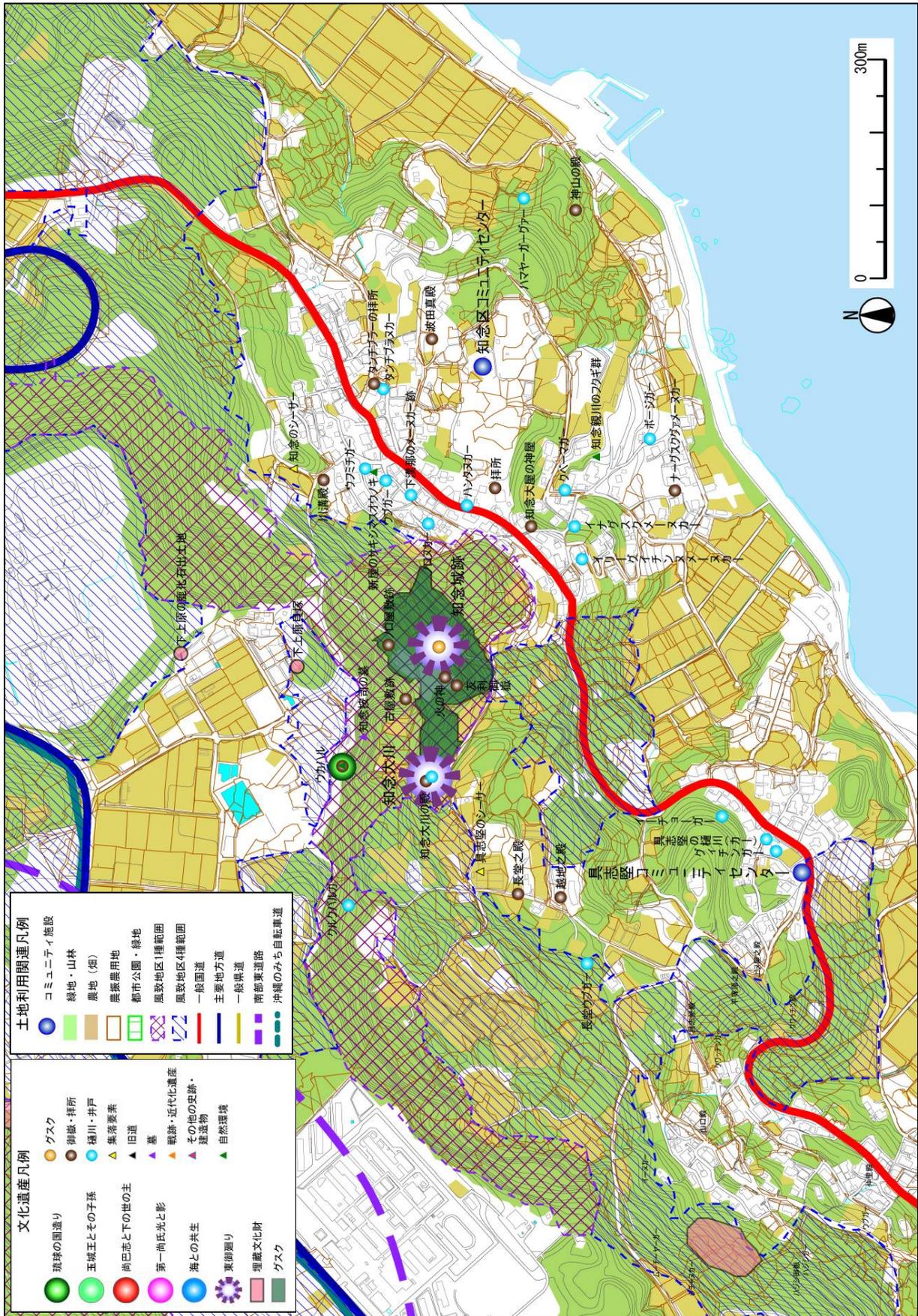
■ 知念文化財案内講師友の会

斎場御獄や知念城跡、久高島など南城市知念の文化財ガイドの組織である。斎場御獄内の施設「緑の館」に常駐している。

オ) 文化遺産保存・活用の課題

- 知念グスクでは、史跡内における発掘調査及び城壁を中心とする修復整備が行われており、報告書が刊行されている。今後は発掘調査の成果を、地元や歴史・考古の愛好家のニーズにこたえて還元していく必要がある。
- 現状ではグスクのみの利用（散策や観光、拝みなど）が多く、知念大川やウファカル、知念按司の墓などの周辺資源を含めた総合的な魅力形成に改善の余地がある。

図 区域の現況図



2) 保存・活用の方針

知念グスクは琉球石灰岩の丘陵地形を利用して築かれた美しい城で、代々の知念按司の居城であるとともに、アマミキヨや穀物起源などが伝承されており、南城市のみならず沖縄の歴史を語る上で重要な資源だと位置づけられます。また、知念集落はグスクとともに形成された集落であり、緑地に囲まれて豊富な水（井戸）や拝所、巨木などが分布しています。地域住民がグスクとの強い結びつきを再確認できるような取り組み——例えば文化遺産の管理や保存・活用、伝承の掘り起こし、関連行事の開催などを支援することが必要だと考えられます。

■区域の歴史文化育成方針

①知念グスクと一帯となった歴史的環境の保全・再生・整備を進める。

- 知念グスクの整備を図る。グスク内には知念間切番所が建てられていたこともあり、時代考証を経た上で施設整備の必要性なども検討する。
- 知念グスクの北側に連続する崖と崖上部は、風致地区の取り組みと連携し、石灰岩植生を含めて歴史的環境の骨格として保全を図る。
- 知念大川及びウファカル周辺は、往時の土地利用を再現するなど稲作発祥の地としての景観形成を図り、かつ緑地を保全することで水源を持続的に確保する。また、グスクから知念大川に通じる石畳道を散策ルート化した整備を図る。

②グスクと知念集落のネットワークを密にする。

- 国道から安全にグスクに至るための利用動線の円滑化や、グスクの西側（字具志堅）からのアクセスの利便性を高める。
- 集落内の豊富な水環境（樋川・井戸）の修景・保全を図り、サキシマスオウノキやシーサーなどと組み合わせた散策、観光活動への利用を誘導する。

③知念地区の国道331号沿いの文化遺産周遊ルートの拠点として機能させる。

- 斎場御嶽に訪れる観光客を周遊させ、地域への経済効果を拡大すべく、相互の利用連携・情報共有を図るとともに、周辺の飲食店なども連携したサービス向上に努める。
- より深い歴史学習・体験が可能ないように、玉城地区にあるヤハラヅカサ、受水走水など、同じ穀物起源やアマミキヨの伝説を共有する地域との利用連携を図る。

(8)久高島の拝所と祭祀保存活用区域プラン

1)現状の整理

ア)区域内の歴史文化資源の特徴

- 『おもろさうし』に「くたか」「こたか」とみえ、『琉球国由来記』に「外間村」「久高村」の両村の名がみえる。このように元々は二つの集落からなっていたが、1903年に外間・久高両村が合併し1村となる。
- イザイホーは12年に一度、午年の旧暦11月に行なわれ、30歳以上の島の女性が島の祭祀集団に加入するための儀式である。久高島で最も大きな神事とされ、琉球古来の祭祀形態を残すとされているが、1978年を最後に行われていない。また、イザイホーのほかにも年間30を超える集落単位の祭祀・行事が存在し、王国時代の祭祀が比較的保存されてきた地域である。
- 琉球開闢の祖・アマミクの上陸の地であり、五穀発祥の地でもあると伝えられ、王国時代には『久高島由来記』という文献史料が編まれており、当時から歴史上の要地だった。島には東方遙拝所である伊敷泊、国王親拝のあったコバウノ森(クボー御嶽)や中之嶽、カベール御嶽等の拝所が多く残されている。
- 16～50歳の男子に百姓地が分配される地割制度が、1892年の土地整理終了後も比較的近年まで残されていた地域であり、その間、私有地は島の祭祀を司る久高ノロ、外間ノロ、久高根人、外間根人の世襲する土地に限られていた。土地を短冊型に区分けされた地割の名残が畑地等に確認することができる。
- 毎年二月に国王と聞得大君は久高島に行幸し、五穀の聖地で初穂祭を行っていたが、1667年からは代理の役人によって執り行われるようになった。
- 島の南方200mのところにあるエラブ岩では旧暦6～12月までエラブウミヘビの漁が行われ、収穫されたウミヘビを薫製にした特産品が有名である。島民は伝統的に海事に長じ、進貢船や襦船、飛船の船頭や水夫として活躍してきたほか、昔から漁業従事者が多い地域である。
- 島の東側の伊敷浜には、砂浜から岩礁・海岸へと移る地域に見られる植物群落(ウコンイソマツ・ミズカンピ・コウライシバ群落)が帯状に発達し、貴重な植生を見せている。また北東端のカベールでは、アダンやオキナワシャリンバイなどの風衝植物群落が発達しており、カベール御嶽の鎮守の森として大切にされている。

表 区域内の主な歴史文化資源

| 名称 | タイプ | 概要 |
|---------------|---------------|---|
| 久高島クボー御嶽 | 御嶽・拝所 自然環境 | クボー御嶽は琉球開びやく神話の七御嶽のひとつで、石囲いの香炉のみが置かれた広い神域である。御嶽の中は、その名のとおりクバ(ピロウ)などの御嶽植物が発達している。市指定文化財。 |
| 伊敷浜(伊敷泊) | 御嶽・拝所 自然環境 | 五穀の種が入った壺が流れついたとされる場所。東方遙拝所でもある。地形的には砂浜や岩礁が広がり、海岸地形の様々な形がみられ、植物群落が発達している。植物群落が県指定文化財(天然記念物)である。 |
| 中之嶽(ウガミグワー) | 御嶽・拝所 | クボー御嶽に次ぐ重要な祭祀場で、国王親拝が行なわれた。東方への遙拝所としての機能もある。 |
| ハタス(ハンタパール御嶽) | 御嶽・拝所 | 伊敷浜で拾い上げた壺に入っていた五穀の種を植えたとされる場所であり、五穀の入っていた壺もここに埋めたとされる。 |
| ヤグルガー | 樋川・井戸 | 五穀発祥伝説に登場する百名シラタルなどアカツミーの婦人が五穀の壺を拾うため禊を行ったと伝わる場所。正月やウマチーなどで神人が禊ぎを行う。 |
| カベール御嶽 | 御嶽・拝所 自然環境 | 島の北東にある聖地で、鎮守の森として大切にされてきた。ピロウやアダンなどの風衝植物が発達しており、植物群落が県指定文化財(天然記念物)である。 |

| 名称 | タイプ | 概要 |
|-------------|-------|---|
| 外間殿 | 御嶽・拝所 | 久高島の祭祀の中でも重要な位置を占める聖地である。コンクリート造で赤瓦葺きの殿と、広い庭を持つ。殿の中には太陽・月・竜宮などの神々が祀られており、隣には神アシャギ(西威王の産屋跡)がある。イザイホーや島の主な行事に使用される。 |
| 久高殿 | 御嶽・拝所 | 外間殿とともに島でも最高の聖地となっている。中央に神アシャギ、右にシラタル殿、左にバイカンヤー(イラブーの薫製所)がある。神アシャギの後方にはイジャイ山と呼ばれる聖なる杜がある。 |
| 大里家 | 御嶽・拝所 | 尚徳王が久高島に参詣した際、島の祝女クニチャサと恋に落ちた。クニチャサはこの大里家系の祝女だと伝えられる。 |
| イザイヤマ | 御嶽・拝所 | イザイホーの際に女性たちが籠もりを行った山である。イザイホーの時には「七つ家」と呼ばれるススキでおおった建物を作った。 |
| ミガー | 樋川・井戸 | 島の南西に所在する井戸で生活用水として利用した。出産後や葬式の時に人や家を清める泉として利用される。 |
| ハンガー(ファンギア) | 樋川・井戸 | 島の南西に所在する井戸で、飲料水のほか、ミガーで潔斎が行えない場合に代用された。1968年にコンクリートに改修された。 |
| イジャイガー | 樋川・井戸 | 島の南西に所在する井戸で、イザイホーの際、新しくナンチュになる婦人たちが禊ぎ・清めをする専用のしたところで、それ以外には使用していけない井戸である。 |
| ウプティガー | 樋川・井戸 | 島の南西に所在する井戸である。人工の自然岩の井戸だったが、1971年にコンクリートで補修されている。かつては水浴や洗濯など生活用水として使用された。 |
| トウギヤアンディ | 樋川・井戸 | 島の南西に所在する井戸で、かつては水浴や洗濯など生活用水として使用された。カー拝みで拝まれた。 |
| 久高島のウステーク | 伝統祭祀 | 五穀豊穡祈願と感謝の奉納舞踊として昔から継承されてきたもので、女性だけで踊る円形舞踊である。 |
| 久高島の漁労習俗 | 生産技術 | 漁業関連祭祀行事をはじめ、漁法や加工技術、共同体内の組織構成を含む。 |
| 前又浜のスーキ | 自然環境 | 高さ約9m、胸高直径8mもあるモンパノキ。島南西の前又浜に所在する。市指定文化財である。 |
| 地割跡 | 生産技術 | 琉球王国時代の農地割替え制度の名残で、土地を短冊形に区分けして配分した。 |

イ) 都市計画等の指定状況

- 旧知念村域は都市計画区域外であったが、平成22年に南城市単独の都市計画区域として再編された。久高島は都市計画区域外に位置づけられている。
- 島の中心及び南側海岸等の農地が農用地区域(農振農用地)に指定。

ウ) 文化遺産に関連する計画等

■「南城市観光振興計画」(平成20年3月)

施策の展開方針として、「おきなわワールド・文化王国玉泉洞」と斎場御嶽・久高島エリアを精神文化の拠点として誘客の主軸として位置づけている。

エ) 拠点施設・主なイベント・関連団体等

■久高島宿泊交流館

平成13年に建てられた宿泊施設で、市より委託を受け久高島振興会が運営している。同団体は交流館の他にもレストランや久高・安座真の船舶待合所などを運営している。

■久高島離島振興総合センター

久高島の集会施設。地元の福祉ボランティア組織のミニデイサービスに利用されたり、南城市植樹祭等の会場として利用されている。

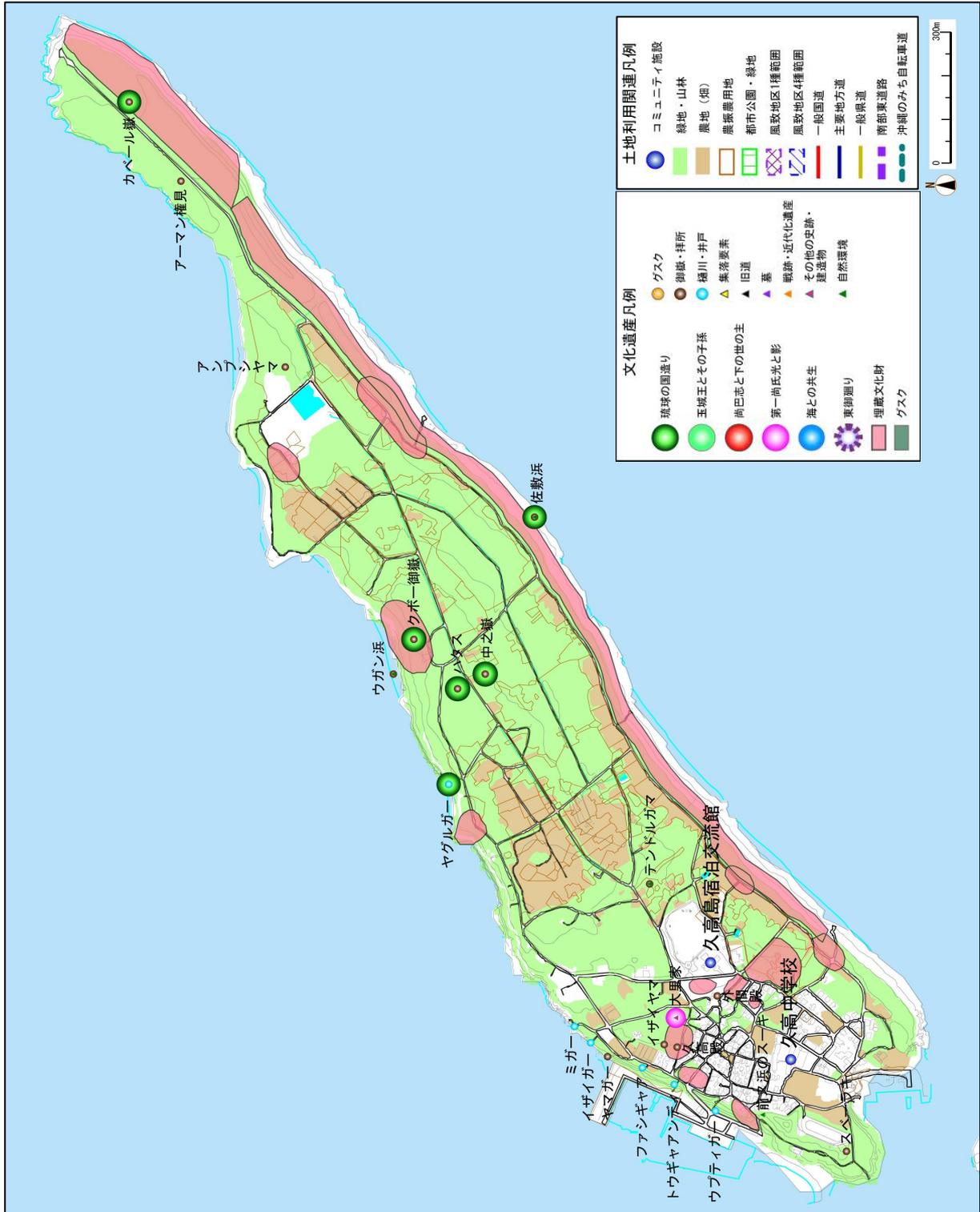
■NPO久高島振興会

平成12年に設立された久高島の経済促進の起爆剤として区で組織された会。宿泊施設・レストランの運営、特産品開発、久高島紹介のリーフレット・ウェブサイトの作成や特産品流通支援のほか、島の歴史・文化の研修会等を行なっている。

オ)文化遺産保存・活用の課題

- 島内には御嶽や拝所、井戸等が分布しているが、その重要性は確認されているものの、文化遺産としての価値の把握（指定等）や環境整備への取り組みが遅れている状況にある。
- 少子高齢化や生活様式・価値観の変化などが影響して、伝統祭祀の後継者不足が深刻であり、祭祀の継続や島の組織運営に今後影響を及ぼす可能性が高い。
- 本島からの定期航路の利便性の向上や近年の癒しブームに伴い、島を訪れる観光客が増加傾向にあり、御嶽への進入やゴミの増加等、島全体の環境負荷が懸念されている。
- 地割跡をはじめ、久高島本来の自然や風土を壊さないような土地の利活用や活性化のあり方について、南城市と久高区の取り組みが始まっている。

図 区域の現況図



2) 保存・活用の方針

久高島は、琉球開びやくと五穀発祥神話の地であり、琉球国王や聞得大君らの久高島参詣が行われてきました。島の聖域空間や伝統祭祀が現在に継承され、聖域として残された海岸には植物群落が自生し、御嶽とともに島全体を緑で包護しています。古い集落構造や石垣、屋敷林の集落景観に加え、伝統的な土地所有制度が継承され、「地割跡」が確認できるなど独特な景観が残されているのも特徴です。

琉球の歴史と文化の基層を垣間見ることのできる久高島は、全県的にも貴重な地域であり、島全体の歴史文化環境の保全が望まれます。そのために今一度過去から久高島の位置づけを学び、内外の意識を高める必要があります。近年は島を訪れる観光客が増えており、文化遺産等を活用した歴史文化プログラムの充実とともに、資源や島の雰囲気を壊さないためのルールづくりに取り組みます。

■区域の歴史文化育成方針

①聖域空間・癒し空間の保全を進める。

- 琉球王国時代から護られてきた御嶽や拝所などの聖域空間について、歴史的・植生的に考証した上で往時の雰囲気を再現するなど必要な整備を図り、保全に努める。
- 久高島を訪れる観光客は島の歴史がかもし出す精神的・霊験性に魅せられている人も多く、このような需要に応える意味でも、聖域空間に関する史料分析、伝承の収集、医学的調査などを進め、情報提供を充実させる。
- 歴史文化資源の環境保護や持続可能性のため、観光利用とのバランスを調査・検討し、ルールづくりも含めて観光容量の適正化や島全体を保全する管理方策を講じる。その際は既存の久高島土地憲章にも立脚するものとする。

②島の歴史文化を誇りに思う住民・出身者アイデンティティを強化する。

- イザイホーなどの固有な伝統行事については、蓄積されてきた研究結果や記録などを有効活用して地域活動や体験学習等に活かすとともに、後継者の育成など祭祀の復活をめざして最大限努力する。
- 地域での生涯学習などを充実して、王国時代の島の位置づけなど歴史文化に関する住民のガイダンス力を高め、また島の歴史文化を題材にしたイベントや地域活動を充実して、文化アイデンティティの強化に努める。

③久高島を中心とした海上の道ネットワーク、遥拝ネットワークを構築する。

- 漁業、海運業に秀でた先人たちの業績を学術的に検証し、その成果をもとにフォーラムやイベントなどを皮切りにした地域連携（例えば奄美地方は久高海人との関連が深い）を進め、海上の道ネットワークを形成する。
- 東方浄土や海上他界の考え方にもとづき、首里や斎場御嶽など県内各地からの遥拝（ウトゥーシ）の対象地となっており、この関係性を学術的に検証し、観光・礼拝ルート化を図るなどネットワーク構築に努める。

図 区域の構想図



(9) 藪薩の浦原周辺保存活用区域プラン

1) 現状の整理

ア) 区域内の歴史文化資源の特徴

- 百名は『おもろさうし』にも「ひやくな」とみえ、百名から首里へ使者が遣わされたことが謡われている。仲村渠は百名から分村した集落で、『琉球国由来記』には「中村渠」と記載されている。集落の西端にアマミキヨが居住したとされるミントングスク、中心には仲村渠樋川がある。
- アマミキヨは東の海から来訪したといわれ、百名海岸の後背地一帯をヤブサツの浦原と呼んでいる。アマミキヨが上陸したヤハラヅカサ、浜川御嶽、稲作発祥地の受水・走水などがあり、これらは歴代国王も行幸した東御廻りの主要な拝所である。
- 稲作発祥の三穂田（御穂田）に由来する「親田御願」は仲村渠に伝わる祭祀で、その豊作を祈る「稲摺節」は百名に伝わる伝統芸能である。

表 区域内の主な歴史文化資源

| 名称 | タイプ | 概要 |
|-------------|-------|---|
| ヤハラヅカサ | 御嶽・拝所 | アマミキヨが最初にたどり着いた場所とされ、国王の行幸が行われた。海中に石碑が建てられている。市指定文化財。 |
| 浜川御嶽 | 御嶽・拝所 | ヤハラヅカサから上がってきたアマミキヨが最初に住んだ場所とされ、国王の行幸が行われた。コンクリート製の祠があり、周囲を琉球石灰岩の石垣で囲んでいる。市指定文化財。 |
| 受水走水 | 樋川・井戸 | 百名南方の森林地の中にある湧水で、稲の発祥にまつわる伝説があり、国王の行幸が行われた。向かって左側が受水、右側が走水。受水の前には三穂田（御穂田）がある。 |
| 三穂田（御穂田） | 生産技術 | 受水走水の前にある小さな水田で、稲発祥の伝説が伝わる。親田御願という神事を行なう場所でもある。 |
| ヤブサツ御嶽 | 御嶽・拝所 | アマミキヨがつくった聖地といわれ、国王の行幸が行われた。古い石製香炉が2つ、新しいコンクリート製の香炉が1つ置かれている。 |
| アイハント御嶽 | 御嶽・拝所 | 大早魃の時は、国王が雨乞いを行なったとされる。琉球石灰岩製の祠があり、中には香炉が置かれている。 |
| カラウカハ（米地の井） | 樋川・井戸 | 稲作発祥にまつわる伝説があり、天孫子ガーとも呼ばれる。琉球石灰岩製で、セメントで補修している。隣には琉球石灰岩製の祠があり、香炉が置かれている。 |
| 長者大主（百名） | 芸能 | 長者の大主がジレー大主から五穀の種を伝授されるというストーリーの芸能。百名の長者の大主は、独特の舞踊で芸能の変遷の過程を示すものである。 |
| 親田御願 | 伝統祭祀 | 1月初午の日、稲の始まりを神に感謝し、受水・走水の隣になる親田で田植えをする神事である。 |
| 稲摺節 | 芸能 | 天美津が三穂田で稲作の手順を教え、豊かに実った稲の刈り取りを祝う踊り。市指定文化財。 |
| アマチジョーガマ | 御嶽・拝所 | 美里之子の娘が赤子の尚巴志を捨てたと伝承される場所。 |

イ) 都市計画等の指定状況

- 旧玉城村域は都市計画区域外であったが、平成22年に南城市単独の都市計画区域として再編された。
- 藪薩の浦原一帯を平成22年に風致地区1種及び4種に指定。
- 田園空間整備事業（平成12～17年度）で受水・走水の体験農場や浜川御嶽に至る散策路が整備されている。

る。

- 藪薩の浦原の一部及び集落周辺の農地が農用地区域（農振農用地）に指定。
- ヤブサツ御嶽や浜川御嶽周辺が地すべり危険箇所に指定。
- 新原ビーチから百名ビーチ一帯の海岸が、海岸保全区域に指定。

ウ)文化遺産に関連する計画等

■「東御廻いを活用した地域振興に関する調査」(平成7年3月)

東御廻り(アガリウマーイ)を沖縄の歴史・文化の学習の場として、また聖地巡礼の道として位置づけ、新たな観光資源として活用するための基本構想。垣花・仲村渠・百名は、①東御廻りコース、③グスク巡りコース、⑤アマミキヨ伝承コースに位置づけられている。(詳細は別途整理)

エ)拠点施設・主なイベント・関連団体等

■新原ビーチ、百名ビーチ

隣接して続くビーチである。新原ビーチは海水浴客も多く、グラスボートの運行などレクリエーション施設となっている。百名ビーチは新原ビーチに比べ静かなビーチで、近年はパラセーリングを楽しむ人も多い。

■たまぐすく文化財ガイド友の会

東御廻りの聖地・城跡・湧水等の主な文化財といった南城市玉城の史跡を案内している。南城市観光人材バンクに登録されており、活発に活動を展開している。

オ)文化遺産保存・活用の課題

- 丘陵地は景勝に優れるため、周辺に飲食店が立地するなど集客スポットとなりつつあり、適切な土地利用の規制・誘導が必要とされる。
- ヤブサツの浦原に隣接する百名、仲村渠、垣花には、琉球開びやくに由来する文化遺産の分布や集落の形成過程に関連性が強いが、伝統祭祀や地域活動はそれぞれ個別に行われている状況であり、3地区が連携した活動の新たな展開が求められる。

2) 保存・活用の方針

この区域は古くから湧水が豊富であり、湧水周辺には先史時代の遺跡も数多く確認され、琉球開びやくや稲作発祥に関連する文化遺産が分布するなど、人々の生活や農耕が開始された琉球発祥の地として位置づけられています。このような歴史文化環境は県内でも例をみないものであり、市民の歴史認識と地域への誇りを高めて、保存・活用に努める必要があります。藪薩の浦原一帯の文化財的な位置づけを強化するとともに、ハンタ緑地も含めて水源の保全にあたり、悠久を流れる水資源が将来の世代にも受け継がれるような対策が必要です。

■区域の歴史文化育成方針

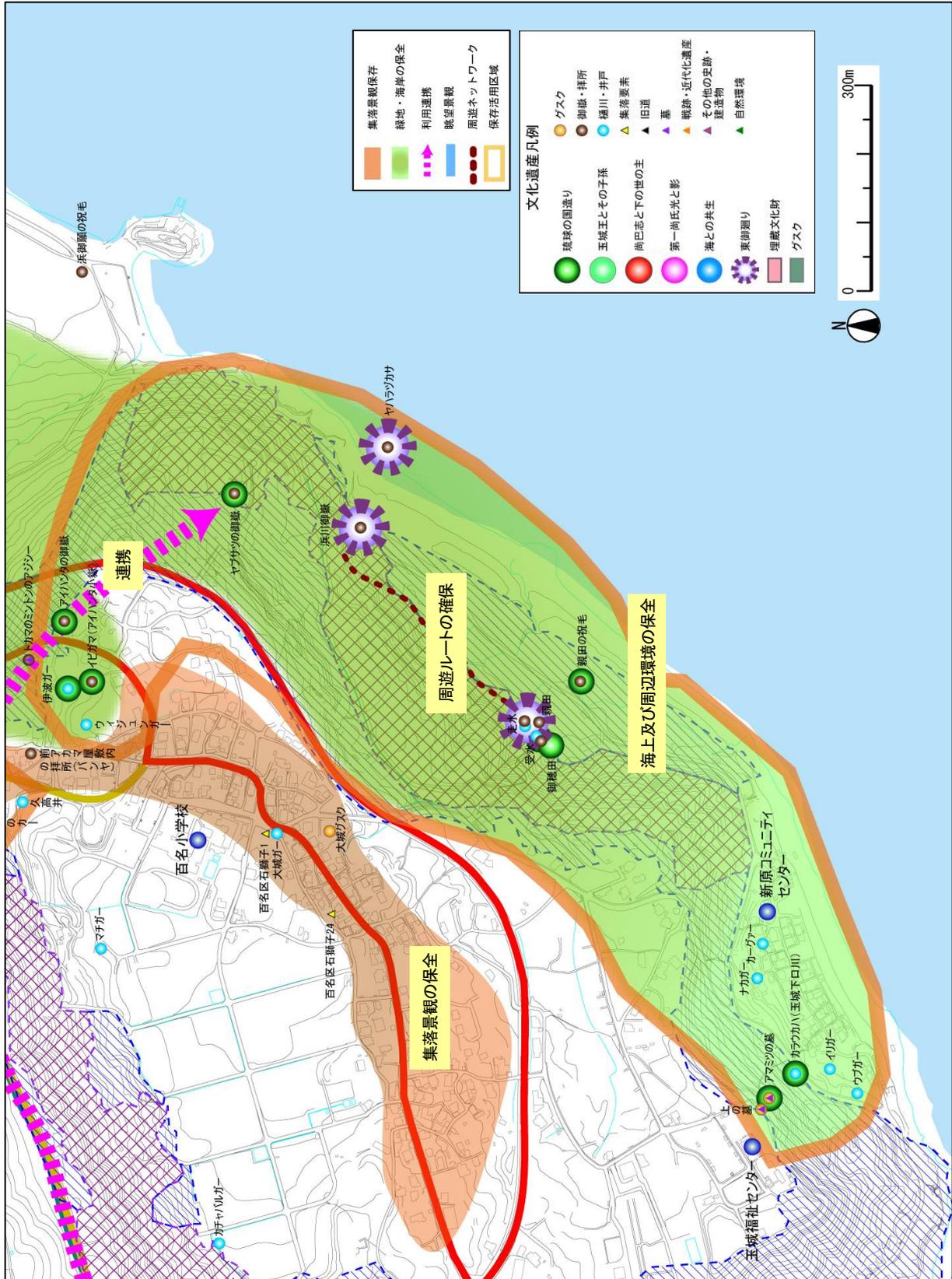
①一帯の文化財指定と風致の維持に努める。

- 藪薩の浦原周辺は、良好な樹林地と白浜の自然海岸などの優れた自然景観とともに、琉球開びやくや稲作発祥に関連する文化遺産が分布しており、史跡など一体的な文化財指定に向けて積極的に取り組む。
- 不要な開発行為による景観破壊、環境低下が起こらないように、風致地区の制度と連携して最大限の対応を図る。また、まとまりのある緑地の保全育成を進め、水源涵養機能の維持に努める。
- 受水走水周辺一帯の農用地についても、むやみな転用が図られないよう注意するとともに、景観性を意識した保全整備や営農指導を図る。

②水資源を題材にした歴史学習とレクリエーションの融合を図る。

- 受水走水～浜川御嶽の遊歩道など、一帯の文化遺産を結ぶ散策路及び解説板等の修復・整備、管理の徹底を図り、利用の利便性を高めて資源の価値をより広く周知する。
- 垣花や仲村渠の樋川の水系と連携して、農業と食の体験、淡水の生物とイノエの生物の比較学習など、歴史学習に他の要素を加えた深みのある体験学習を推進する。
- 海岸では、海水浴や潮干狩りなどレク活動と歴史文化活動との利用区分を図り、ヤハラヅカサや浜川御嶽等の文化遺産が劣化しないような対策を進める。

図 区域の構想図



(10) ミントングスク・玉城グスク周辺保存活用区域

1) 現状の整理

ア) 区域内の歴史文化資源の特徴

- 垣花は垣花グスクをはさんで東側に和名村、西側に垣花村が立地する大きな集落で、伝承では島添大里按司に滅ぼされた大城按司の遺児が母親の里である垣花に隠れ、後に那覇に移り、那覇の垣花となったといわれる。和名は戦後米軍に接収され、現在ゴルフ場の敷地になっている。
- 水量豊富な地域であり、国指定の仲村渠樋川その他、垣花樋川は環境省の全国名水百選に選ばれている。仲村渠樋川は少なくとも19世紀初頭には用水施設として利用されており、1912年に貯水槽や石畳道、昭和初期には共同風呂（五右衛門風呂）が整備され、集落の憩いの場となっていた。現在も往時のおおりの復元整備が行われ、人々の憩いの場であるとともに参拝に訪れる人も多い。垣花樋川は垣花集落の南側に所在する樋川で、樋川までは険しい石畳道が続くが、水量豊富で風光明媚な場所に位置している。
- 垣花グスクは二つの郭を持つ山城で、正確な築城年代は不明だがミントン按司の次男が築城したとの伝承もある。標高約120mの琉球石灰岩丘陵上に形成され、面積は約1万2000平方メートルである。須恵器、輸入陶磁器、グスク土器などが確認されており、グスク内には按司墓がある。
- 玉城グスクは「玉城アマツヅ」と呼ばれ、琉球開びやく伝説の七御嶽の一つとしてアマミキヨによって築かれたとされ、英祖王統の玉城王の居城であったとも伝えられる。早魃の時には国王が行幸し、雨乞いが行なわれた。集落の北西方の標高約180mの丘陵上にあり、面積は約7900平方メートルである。連郭式のグスクで主郭・二の郭・三の郭からなるが、戦災や戦後に石積み撤去されるなどの破壊を受け、二の郭・三の郭は僅かに根石を残すのみである。ミントングスク、垣花グスクから玉城グスクにいたる道路がグスクロードとして整備されている。

表 区域内の主な歴史文化資源

| 名称 | タイプ | 概要 |
|------------|-------|---|
| 玉城城跡 | グスク | 琉球開びやくの御嶽のひとつとされ、英祖王統の玉城王の居城だったと伝えられる。国王の行幸も行われている。国指定史跡。 |
| ミントングスク | グスク | アマミキヨの安住の地とされる。頂上付近の岩陰や洞窟には神墓といわれる拝所がある。石垣は確認できないが、周辺部からは石斧や沖縄貝塚中期土器片、貝殻などが発見されている。県指定史跡。 |
| 垣花城跡 | グスク | 三山時代まで使われていたと思われる山城。ミントン按司の次男が築城したともいわれる。 |
| アマチジョーガマ | 御嶽・拝所 | 美里之子の娘が赤子の尚巴志を捨てたと伝承される場所。 |
| 仲村渠樋川 | 樋川・井戸 | 大正元年に津堅島の石工を雇って築造された。粟石を使用し、3つの樋を持つ。当時は生活用水として、現在は農業用水として使用されている。近年周辺整備が行われた。国指定文化財。 |
| 垣花樋川(ウフガ一) | 樋川・井戸 | 垣花集落の南側に所在し、現在も水量豊かである。右側を男川、左側を女川、その下流にある浅い水溜りを馬浴川という。1985年に環境庁の名水百選に選ばれた。 |

イ) 都市計画等の指定状況

- 旧玉城村域は都市計画区域外であったが、平成22年に南城市単独の都市計画区域として再編された。
- ミントングスク及び垣花グスク、玉城グスクの史跡範囲及び周辺を、平成22年に風致地区1種及び4種に指定。
- 「玉城村土地利用調整基本計画」(平成16年3月)では、垣花グスクを含めたグスクロード以南の斜面を「グスク環境保全地区」と位置づけている。

ウ) 文化遺産に関連する計画等

■「東御廻いを活用した地域振興に関する調査」(平成7年3月)

東御廻り(アガリウマーイ)を沖縄の歴史・文化の学習の場として、また聖地巡礼の道として位置づけ、新たな観光資源として活用するための基本構想。垣花・仲村渠・百名は、①東御廻りコース、③グスク巡りコース、⑤アマミキヨ伝承コースに位置づけられている。(詳細は別途整理)

エ) 拠点施設・主なイベント・関連団体等

■グスクロード

糸数グスク、玉城グスク、ミントングスク、垣花グスクを結ぶ全長4kmの道。グスクロードの中間にグスクロード公園がある。

■沖縄の道自転車道

南城市前川と首里城公園とを結ぶ自転車兼歩行者専用道路で、グスクロードを中心に自転車歩行ルートが整備済みである。

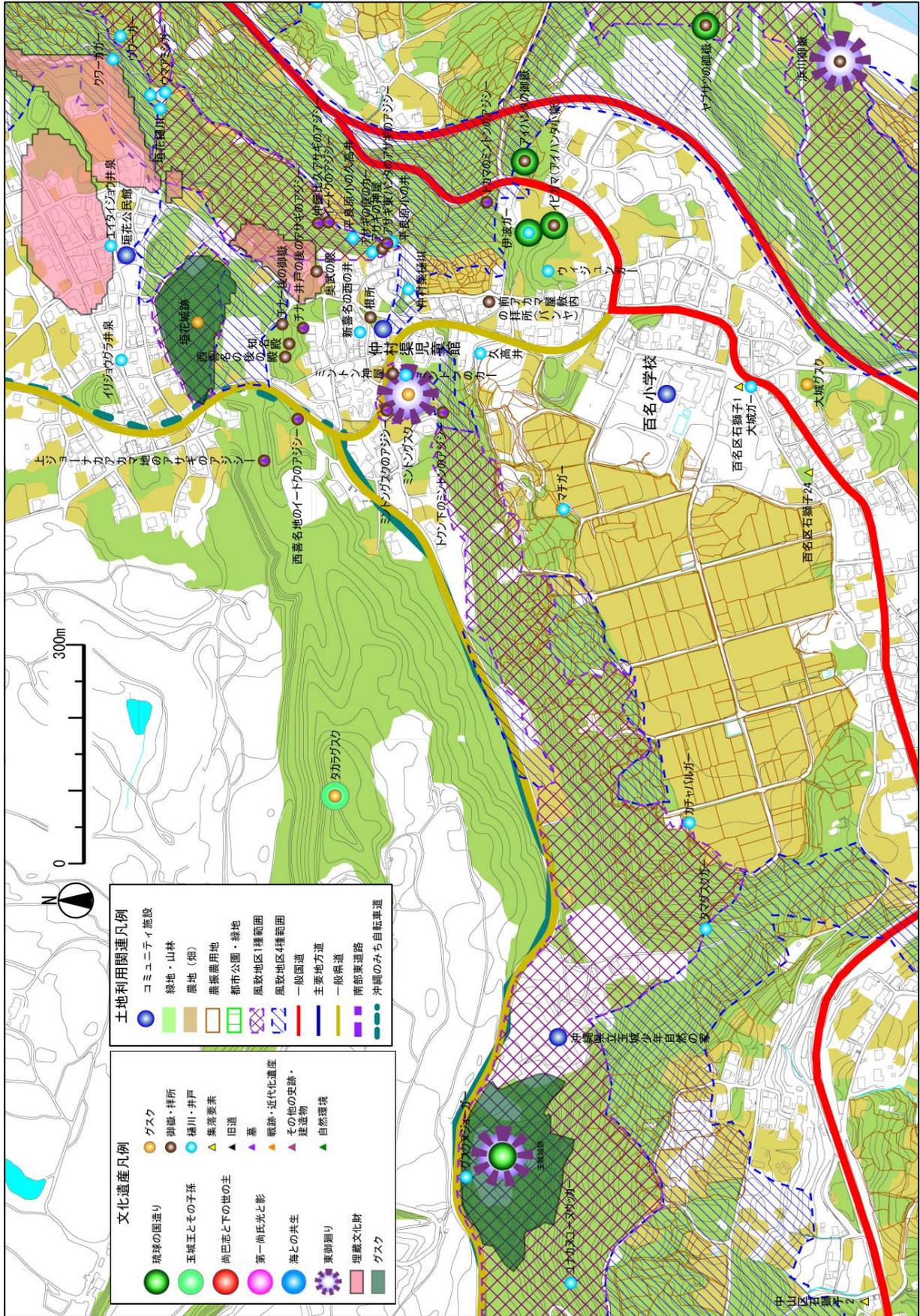
■たまぐすく文化財ガイド友の会

東御廻りの聖地・城跡・湧水等の主な文化財(糸数アブチラガマ除く)といった南城市玉城の史跡を案内している。南城市観光人材バンクに登録されており、活発に活動を展開している。

オ) 文化遺産保存・活用の課題

- 区域を特徴づける水資源は、以前に比べると水量が少なくなっており、水源・水脈の保護が必要とされる状況である。
- 丘陵地は景勝に優れるため、周辺に飲食店が立地するなど集客スポットとなりつつあり、適切な土地利用の規制・誘導が必要とされる。
- 垣花・仲村渠・百名の3地区は琉球開びやくに由来する文化遺産の分布や集落の形成過程に関連性が強いが、伝統祭祀や地域活動はそれぞれ個別に行われている状況であり、3地区が連携した活動の新たな展開が求められる。

図 区域の現況図



2) 保存・活用の方針

県指定文化財（史跡）のミントングスクはアマミキヨの安住の地と伝えられますが、琉球王府編纂の史書では触れられておらず、謎を秘めた歴史遺産です。小高い森を形成するグスク内には久高島への遥拝所や火の神などが分布し、聖域らしい雰囲気醸し出しています。近隣に国指定文化財（史跡）の仲村渠樋川が立地し、仲村渠集落とのつながりが深いほか、垣花城跡、垣花樋川などグスクや水をテーマに周辺集落にまでネットワークが広がります。また、玉城グスクも同じくアマミキヨ伝説に連なる遺跡で、太陽の運行に関連して建造されたという見方があるように、やはり不思議な魅力を持っています。琉球の古代グスクともいえるこれらの史跡を中心に、地域の多様な文化遺産をストーリー性を持たせながら結びつけていくことが望まれます。

■区域の歴史文化育成方針

①各資源のネットワーク化と利用連携を進める。

- ミントングスク、垣花城跡、玉城グスクなどグスク間のネットワークを構築して連携強化を図る。
- 県道137号線やグスクロードについて、周辺の文化遺産と調和させる観点から修景や改修の必要性を検討し、必要ならば改修などの措置を図る。

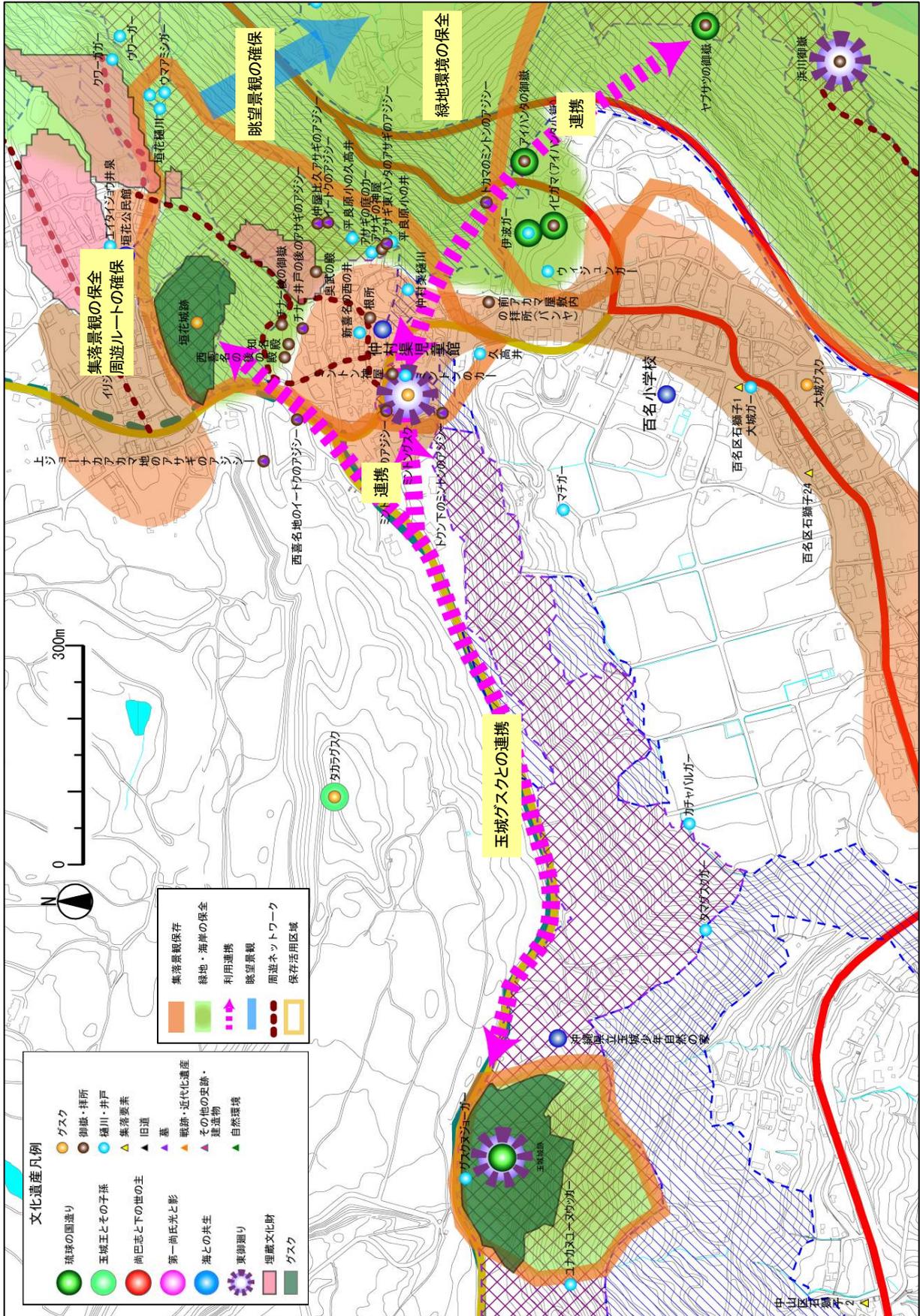
②斜面緑地と水資源の保全育成に努める。

- グスクをはじめとしたビューポイントからの眺望の確保、景観保全や修景を推進するとともに、まとまりのある斜面緑地の保全育成を進めて、この区域を特徴づける豊かな水資源の涵養機能を維持する。
- 仲村渠・垣花の樋川の水系を適切に保全・育成するとともに、志喜屋の水耕農地での農業と食の体験、淡水の生物とイノーの生物の比較学習など、歴史学習に他の要素を加えて深みを持たせる。

③集落間の文化活動を活発化する。

- 仲村渠・垣花両集落に分布する文化遺産が祭祀に利用されることを今後も継承するとともに、これらの文化遺産を活用した市民活動やイベントの機会を創出するなどして、両集落が一緒に文化活動を行いやすい環境づくりをめざす。
- 垣花や仲村渠から志喜屋に連絡する散策ルートを整備するなど、志喜屋に分布する資源との連携についても取り組む。

図 区域の概念図



(11) 第一尚氏王統保存活用区域プラン

1) 現状の整理

ア) 区域内の歴史文化資源の特徴

- 富里村は『琉球国由来記』に「富里村」とみえ、嶺村廢村後に東村渠に新設されたとされる。尚敬王代（1713～51年）に玉城グスク内にあった間切番所がこの地に移された。島尻方東まわりの南風原の宿道は、知念番所から赤道馬場、垣花馬場、玉城村、富里番所、一里グムイ（小堀）・前川村を経て東風平間切に通じていた。
- 當山は『琉球国高究帳』に記載されており、時期は未詳だが、嶺村の一部が當山村になったとされる。
- 尚金福王の死後の1453年、尚布里は王位継承をめぐる甥の志魯（尚金福の子）と争い、當山に隠遁したと言われている。また1461年の尚徳王即位のときには、国王の異母兄弟に当たる尚泰王の子らが富里に逃れ、長男の安次富金橋は安次富グスク、次男の美津葉多武喜と長女の百人踏揚は大川グスク、四男の八幡加那志は仲栄真グスクに住みついたと伝えられる。
- 富里・當山にはこうした第一尚氏系統に由来する門中や墓もある。尚泰久王は、当初首里天山陵に葬られたが、第二尚氏の革命による動乱で場所の移転を余儀なくされ、後に富里の地で子どもたちとともに祀られることとなった。

表 区域内の主な歴史文化資源

| 名称 | タイプ | 概要 |
|-------------------|----------|---|
| 仲栄真グスク | グスク | 尚巴志の妾の子といわれる豊見城按司によって築城が開始され、尚泰久の四男・八幡加那志が第一尚氏復興のため引き継いで完成させたといわれる。城壁は現在取り壊され、一部が残っている。 |
| 尚泰久之墓 | 墓 | 富里南西のウフギン森に所在する。元々尚泰久の骨は首里の天山陵に葬られていたが、その後転々とし、1908年に現在の所に移された。 |
| 安次富金橋の墓 | 墓 | 尚泰久の長男・安次富金橋の墓。尚泰久王の墓と隣接する。 |
| 安次富グスク | グスク | 尚泰久の長男・安次富金橋が築いたとされるグスク。石積みは確認できないが、大岩の上と下に按司墓があるという。 |
| 大川グスク | グスク | 尚泰久の三男・三津葉多武喜の住居跡。グスク内の墓は三津葉多武喜移転前のもの。 |
| 尚布里の墓 | 墓 | 尚布里とウナジャラのマカトカニの墓。その裏に布里の次男・布里子の墓がある。 |
| 八幡加那志の墓 | 墓 | 尚泰久の四男・八幡加那志の墓。當山宇和原の森の頂上にあり、宇和グスクとも呼ばれる。 |
| 百十踏揚と三津葉多武喜の墓 | 墓 | 尚泰久の王女・百十踏揚と三男・三津葉多武喜の墓。三津葉多武喜の墓は住居跡といわれる大川グスクにあったが、現地に移葬された。 |
| 三津葉多武喜、百十踏揚の遺品と位牌 | 他の遺跡・建造物 | 富里の屋号前仲栄真の神アシャギに、三津葉多武喜と百十踏揚位牌と遺品（カンザシ、古文書、銅鏡）が保管されている。 |

イ) 都市計画等の指定状況

- 旧玉城村域は都市計画区域外であったが、平成22年に南城市単独の都市計画区域として再編された。
- 百十踏揚と三津葉多武喜の墓周辺からグスクロード以南を、平成22年に風致地区1種及び4種に指定。

- 富里・當山の両集落を囲む農地が農用地区域（農振農用地）に指定。
- 富里・當山のほぼ全域が地すべり危険箇所指定。

ウ)文化遺産に関連する計画等

■「東御廻りを活用した地域振興に関する調査」(平成7年3月)

東御廻り（アガリウマーイ）を沖縄の歴史・文化の学習の場として、また聖地巡礼の道として位置づけ、新たな観光資源として活用するための基本構想。富里・當山は、②宿次のみちコースに位置づけられている。（詳細は別途整理）

■「島尻東地区田園空間博物館整備基本計画」(平成13年2月)

島尻東地区（玉城地区・知念地区）における農業の歴史を背景とした田園空間を博物館とみだてて、伝統的農業施設や農村景観等を展示施設として位置づけ、整備することを目的に策定された計画であり、平成12～17年の期間に整備事業が実施された。本計画ではグスクロード公園から富里集落にいたる旧道（ウザファビラ）の整備が位置づけられているが、未整備のままである。

エ)拠点施設・主なイベント・関連団体等

■南城市役所、玉城総合体育館、中央公民館

南城市役所玉城庁舎周辺には、体育館、中央公民館などの公共施設が立地する。南城市まつりの際には、メイン会場のグスクロード公園と連携し、体育館にて文化協会の総合文化展が開かれた。

■沖縄の道自転車道

南城市前川と首里城公園とを結ぶ自転車兼歩行者専用道路で、グスクロードを中心に自転車歩行ルートが整備済みである。

■グスクロード公園

平成10年に整備。玉城城跡に隣接し、多目的広場やオートキャンプ場、遊具を備えた公園である。島尻地区田園空間整備事業の中で、グスクロード公園に隣接してコア施設が整備された。

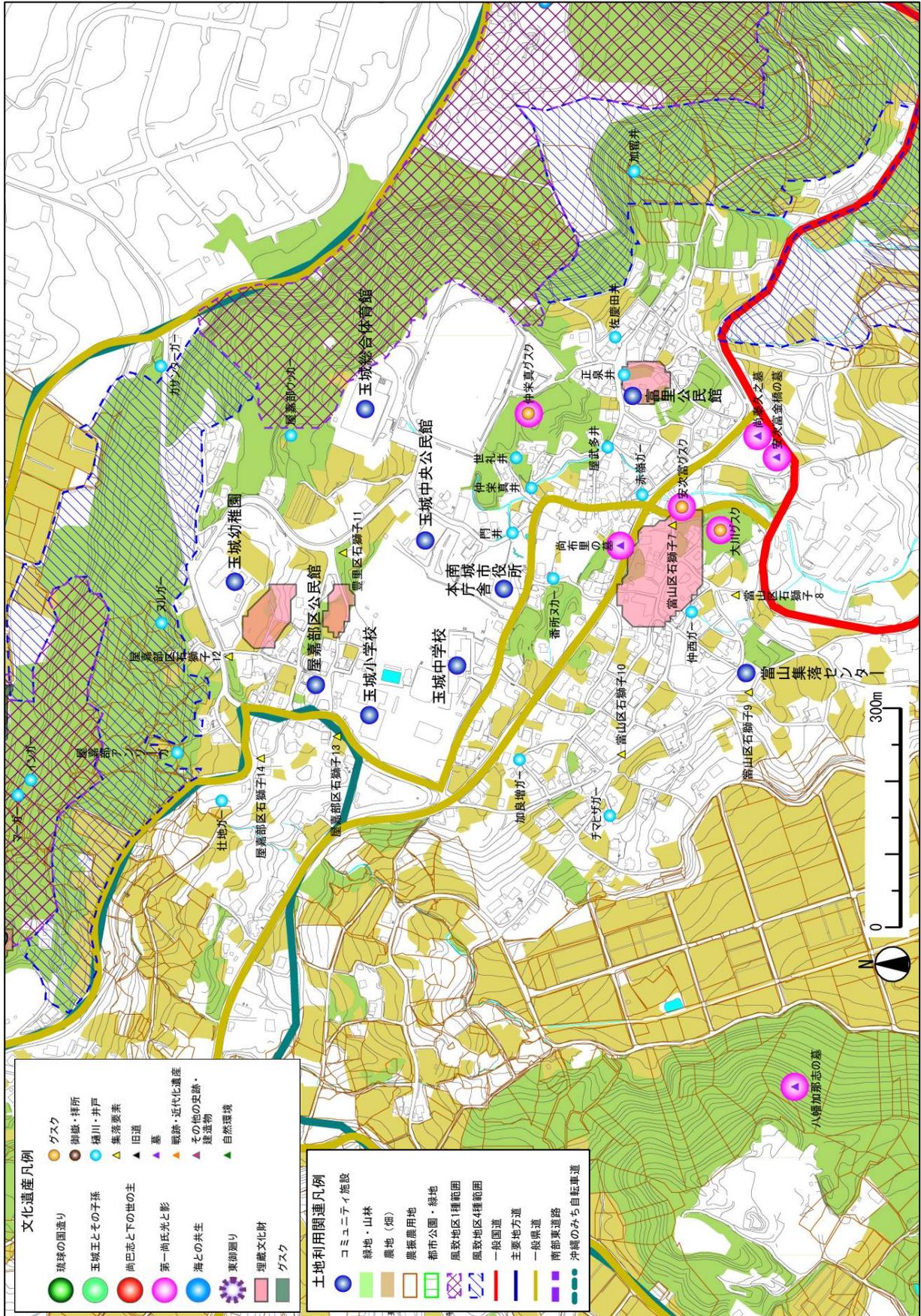
■たまぐすく文化財ガイド友の会

東御廻りの聖地・城跡・湧水等の主な文化財（糸数アブチラガマ除く）といった南城市玉城の史跡を有料で案内している。南城市観光人材バンクに登録されており、活発に活動を展開している。

オ)文化遺産保存・活用の課題

- 第一尚氏の伝承に関わるグスクや墓が分布しているが、学術的な調査はほとんど行われておらず、伝承者の断絶や資源の劣化が進みつつある。

図 区域の現況図



2) 保存・活用の方針

富里・當山は、尚布里や尚泰久一族に由来するグスクや墓などの文化遺産が集中しており、第一尚氏にまつわる多くの伝承が内包された地域です。第一尚氏王統の末裔は、正史という表舞台には登場しませんが、その悲劇性ゆえにかえって民衆に語られ記憶される存在でした。いまでも第一尚氏やその家臣に連なる系譜をもった門中が多く分布し、清明祭や門中拝みなどの行事を熱心に行っています。

このように先祖を敬い慕う心は沖縄人が最も重視する心性であり、富里・當山はその意味でモデルとなる区域です。第一尚氏の伝承を丹念に拾い上げ、それを整理し、地域で共有していくことをとおして、現在と過去、住民と先祖、地域と文化遺産の関係を確かめ、関連文化財群の保存・活用のモチベーションとすることが大事です。

■区域の歴史文化育成方針

①第一尚氏王統に関する伝承の発掘と発信に努める。

- 市史編纂事業と連携しながら、第一尚氏に関連するグスクや墓などの調査研究、伝承の収集・整理を進め、整理したデータは冊子やウェブサイト等などでなるべく公開する。
- 第一尚氏王統を題材にした講演会・勉強会、史劇や琉歌の創作などの活動を市民に広めていく。

②文化遺産を核とした集落景観の整備を支援する。

- 石畳道など石製建造物の保全・修復、水資源を活用した親水性の演出、サイン等による文化遺産のネットワーク化など、伝統集落にふさわしい景観形成を図る。
- 都市計画法の風致地区と連動して、ハンタ緑地から仲栄真グスクにかけての緑地を保全する。

(12) 奥武島保存活用区域プラン

1) 現状の整理

ア) 区域内の歴史文化資源の特徴

- 『絵図郷村帳』には「あふ島」とあり、『琉球国由来記』には奥武村とある。地名の「オー」は大きな島の近くにある小島に多くつけられる。島内には耕地が少なく、島民の多くは漁業に従事し、百姓地は対岸の雄樋川河口左岸の堀川に飛び地としてあった。沖縄本島への交通手段は船だったが、1937（昭和12）年に本島との間に木橋が架けられた（1940年からコンクリート橋）。
- 奥武観音堂は、集落の南東に位置し、かつて島に漂着した中国船を島民が救助し、そのお礼に贈られた観音像を安置するために建立した。旧8月15日には臼太鼓が観音堂前で催され、旧9月18日にはウクァンノンウガミ（御観音拝み）が行われる。
- 旧5月4日に開催される奥武のハーリーは、玉城区内唯一のハーリー行事である。奥武島観音堂に島の繁栄と豊漁を祈願して行ったのが始まりとされる。

表 区域内の主な歴史文化資源

| 名称 | タイプ | 概要 |
|----------|-------|---|
| 奥武観音堂周辺 | 御嶽・拝所 | 暴風雨により奥武島近辺で遭難した唐船の乗組員を島民が救助し、そのお礼として寄贈された黄金の観音像を奉っている。 |
| タカラグスク | グスク | 奥武観音堂の南側に位置し、琉球石灰岩陰に骨があり奥武集落発祥と関わりのあるグスクと考えられているが、詳細は不明。 |
| 観音ガー | 樋川・井戸 | 昭和2年、大城幸之一氏（玉城村初の国会議員）が県からボーリング資材を借り受けて試掘し、地下水があることを確認。昭和2年末頃に建造。水量・水質が最も良かったため飲料水として使用された。 |
| 上原ガー | 樋川・井戸 | 観音ガー同様、県からボーリング資材を借り受けて地下水の存在を確認し、建造。飲料水として使用されたが、満潮時や干ばつ時には水が塩辛くなった。 |
| ウプガー | 樋川・井戸 | 奥武集落で最も早くつくられたと考えられている。現在は正月の若水や、産湯、死者の清め等に使用され、また集落の行事や公共工事の着工・竣工時にも拝まれる。 |
| 西ガー | 樋川・井戸 | 飲料水として使用されていたが、現在はコンクリートで蓋がされ使用されていない。1月の初ウビー等の拝所となっている。 |
| 観音堂祭 | 伝統祭祀 | 五穀豊穡や島民の健康を祈願し、先祖の偉業をたたえ、感謝する祭祀。祭祀は毎年旧暦9月18日に行なわれるが、5年に一度、観音堂へ伝統芸能が奉納される。 |
| 奥武島のハーリー | 伝統祭祀 | 旧暦5月4日に豊漁祈願のため海神祭が催され、ハーリーが行なわれる。 |

イ) 都市計画等の指定状況

- 旧玉城村域は都市計画区域外であったが、平成22年に南城市単独の都市計画区域として再編された。ただし奥武島は久高島とともに都市計画区域外に位置づけられている。
- 奥武島全域が農業振興地域に指定。
- 奥武島北岸が海岸保全区域に指定。

ウ)文化遺産に関連する計画等

文化遺産に関する関連計画は特になし

エ)拠点施設・主なイベント・関連団体等

■奥武漁港

玉城地区の漁港のひとつでグラスボート観光も行われている。島北東部が埋め立て拡張され、スポーツグラウンドや駐車場も整備されている。漁港沿いの道路には鮮魚店が立ち並び、休日には魚介類を買い求める当該からの行楽客でにぎわう。

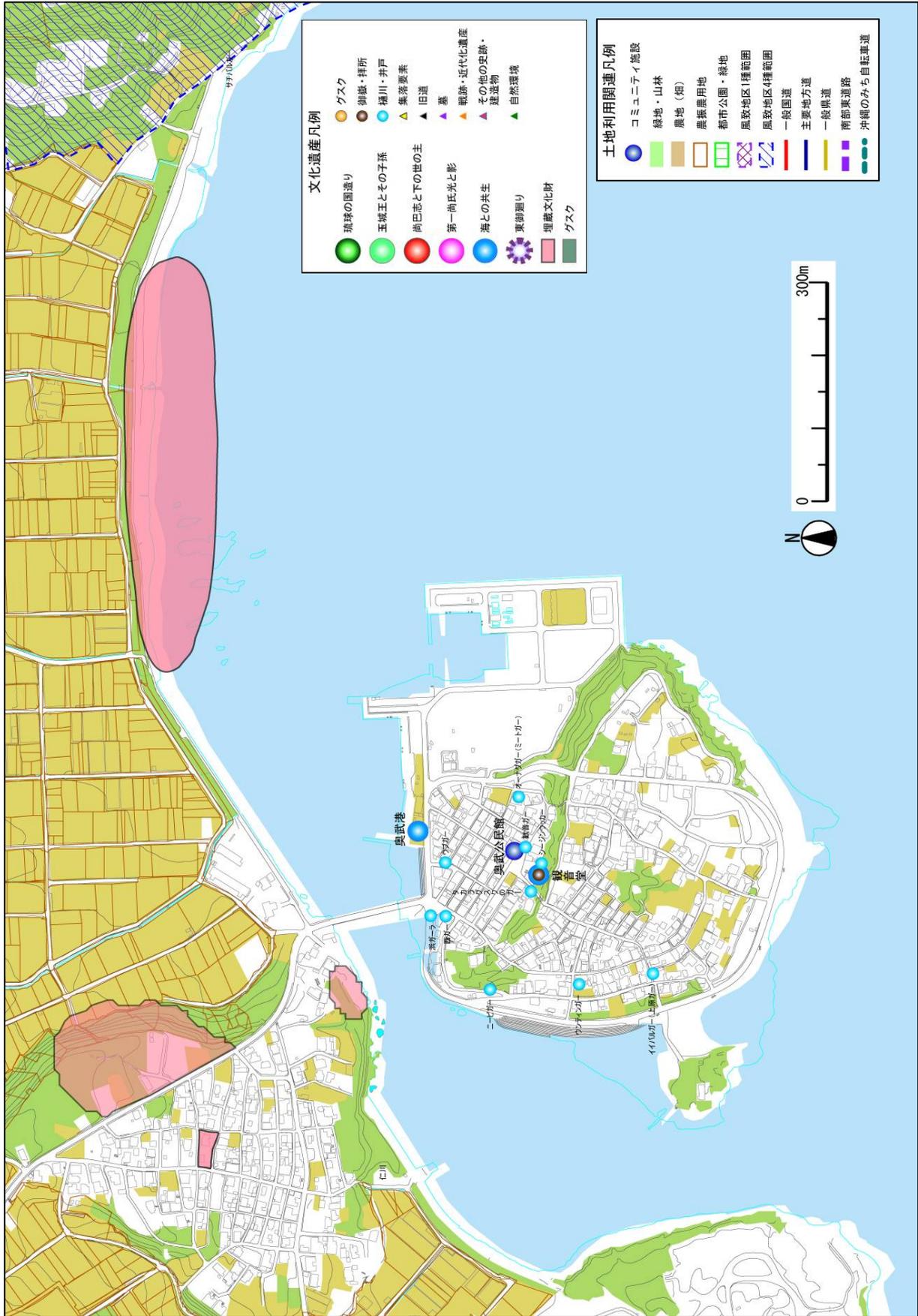
■奥武棒保存会

平成10年に発足された保存会。5年に1度催される観音堂祭で奉納される。

オ)文化遺産保存・活用の課題

- 少子高齢化や島民の沖縄本島の流出により、伝統祭祀の後継者不足が懸念される。
- 沖縄本島と陸路でつながる利便性から、休日は島を訪れる人々でにぎわう一方、集落内への車の乗り入れやゴミの増加等、島全体の環境負荷が懸念されている。

図 区域の現況図



2) 保存・活用の方針

奥武島は古くから漁業をなりわいとした島であり、観音堂やハーリー、漁業風景など、海と暮らす人々の生活や文化が残されています。沖縄本島に身近な島として交通の利便性は増しましたが、斜面の狭隘地に立つ家並みやトビイカを干す風景など漁業集落らしい特徴的な景観もみられます。

市域の3方を海に囲まれた南城市において、海との関わりはとても重要であり、奥武島は人々と海との共生が最も象徴的に示された地域といえます。奥武島をモデルとして、地域住民が海との結びつきを再確認できるような取り組み——例えば海的生活史や伝承の掘りおこし、島独特の風景や環境の保存・活用など——が必要だと考えられます。

■区域の歴史文化育成方針

①観音堂はじめ関連文化遺産の情報発信に努める。

- 観音堂に由来する伝承、それに関わる地域の行事についての調査研究や情報の収集を行い、パンフレットや冊子、ウェブサイトなど各種媒体での情報発信を進める。
- 漁業や海運業等の先人たちの技術、島の伝統行事などをデジタルに記録し、地域住民に対して島の生活文化の学習機会の創出を図るとともに、地域外の人々への情報提供体制を築く。
- 「奥武」の語源諸説についても解説板の整備、インターネット等での情報発信を進める。

②漁業の島ならではの魅力的な景観を形成する。

- 集落内の美化・修景を進めるとともに、良好な住環境については保全を進め、二項道路沿いの建物については建築基準法上の位置づけにしたがって建替え時に景観に配慮した建築指導などを行う。
- 市の景観まちづくり計画と連携しながら、斜面地の特徴的な家並みなど暮らしの知恵や信仰が生きる景観について、地域住民と調整・協力して保全・誘導・整備する。
- 集落道の環境整備を行うことで、徒歩による島内散策への誘導を図る。
- 漁港や海岸域の修景、井戸の修景整備を進め、また海面の埋立や海岸線での開発行為等は抑制するなどして、島の見どころとなる資源の維持・魅力向上を図る。
- 島の各所に点在して残る斜面緑地の保全や本来の海岸植生への整備を進め、カーの水涵養・水質改善を図る。

③海との共生のイメージが膨らむような取り組みをはじめめる。

- 漁業やハーリー、生活文化等の体験、特産品（アーサてんぷら等）づくりの体験など、島の生活文化を楽しむ企画を立ち上げ、漁業引退者等を活用して海ガイドを育成するなど、観光と歴史文化を融合した島の魅力づけを図る。
- 「全県ハーリーサミット」「イカ釣りダービー」「ハマウリ環境学習」「爬龍船製作体験」など漁業や伝統行事に関するイベントやシンポジウムを開催し、奥武島発の海との共生ネットワークの形成を図る。

(13) 糸数グスク周辺保存活用区域プラン

1) 現状の整理

ア) 区域内の歴史文化資源の特徴

- 糸数は『おもろさうし』に「いとかず」として登場し、17世紀の『絵図郷村帳』にも「糸数村」と記されていることから、古い時代から名称が定着していたと考えられる。
- 古くはサナン、クールク、イトカズの3つの集団からなり、サナン集団は根石グスク、クールク集団はウフヤマ、イトカズ集団はクニニーを管理していた。それぞれの御嶽付近に居住していたと伝えられる。
- 糸数グスクは、石灰岩丘陵上に石積み城壁をめぐるした大型の城塞的グスクで、面積は約2万㎡。城壁は野面積みと切石積みが併用され、14世紀に完成したものと考えられている。英祖王統4代玉城王の三男を糸数城主に命じて築城させたといわれており、城内には糸数之嶽や殿が存在する。
- 周囲には「元グスク」とも呼ばれる根石グスクや、同時代遺跡の蔵屋敷遺跡なども分布している。
- 19世紀の中頃には首里系の土族が集落東方の喜良原に入植して屋取集落を形成し、1930年に分立して糸数2区と、戦後は喜良原区となった。
- 沖縄戦では陣地壕や避難壕が掘られ、特に糸数壕（アブチラガマ）は沖縄陸軍病院糸数分室になり、多くの負傷兵や住民が避難生活を送った。また糸数城跡内にも旧日本軍の監視哨がつくられた。
- 糸数青年会では狂言「掃除さーぶー」を13年ぶりに復活させ、さらに平成21年のウマチー行事では、旗頭の奉納を行うなど、グスクを活用した地域の取り組みが行われつつある。

表 区域内の主な歴史文化資源

| 名称 | タイプ | 概要 |
|-----------------|----------|---|
| 糸数グスク | グスク | 玉城城の出城として中山に対峙し、比嘉ウチョウの留守中、上間按司に襲われて落城したとの伝承がある。野面積みと切石積みの両方が用いられている。 |
| 蔵屋敷遺跡 | 埋蔵文化財 | 糸数城跡の東方の小字竹之口原に所在する。高さ1m前後の野面積みの石積みが残っており、調査ではグスク系土器、青磁、白磁などが出土している。 |
| 根石グスク | グスク | 糸数按司が糸数グスクを築城する際に根城として使用したと伝えられる。「元グスク」「ニーシウガン」ともいい、村落祭祀にあつては最初にここから拝む。石垣で囲まれた円形のグスクである。 |
| 糸数按司の墓 | 墓 | 糸数按司のもつと伝わる墓。按司墓は糸数竹之口崖下にあつたが、その後城跡内に移されている。墓周辺は石灰岩が露出し、高低差のある地形となっている。 |
| 糸数壕 (アブチラガマ) | 戦跡・近代化遺産 | 全長270mの自然洞穴で、1944年に日本軍の陣地壕として使用され、1945年末からは沖縄陸軍病院糸数分室となり、病院の撤去後は住民も避難したとされる。 |
| アブチラガマの井泉 | 樋川・井戸 | アブチラガマ内にあり、そのときの貴重な飲み水として使われた。 |
| 糸数樋川 | 樋川・井戸 | 雑石積みだったが、110年程前に現在の切石積みになった。集落から樋川へ通じる坂道には石畳が残る。昔はウブガーとして使用されたほか、男ガー(太陽ガー)とも呼ばれ、男性の水浴びの場として利用された。簡易水道の水源。 |
| カマンカジ | 樋川・井戸 | カンジャー坂の下方崖下にあつた。崖を保護するように切石積みの段々構造になっている。女ガー(月ガー)と呼ばれ、女性の水浴びの場として利用された。簡易水道の水源。 |

| 名称 | タイプ | 概要 |
|--------|------|----------------------------------|
| 糸数区石獅子 | 集落要素 | 糸数区にある石獅子で、集落の入り口となる4カ所に設置されている。 |

イ) 都市計画等の指定状況

- 旧玉城村域は都市計画区域外であったが、平成22年に南城市単独の都市計画区域として再編された。
- 糸数グスクの史跡範囲及び周辺を、平成22年に風致地区1種及び4種に指定。
- 「玉城村土地利用調整基本計画」(平成16年3月)では、糸数グスクを含めたグスクロード以南の斜面を「グスク環境保全地区」と位置づけている。
- 糸数グスクを囲む農地が農用地区域(農振農用地)に指定。
- 糸数グスクの史跡範囲の一部が地すべり危険箇所に指定。

ウ) 文化遺産に関連する計画等

■「糸数城跡整備実施計画報告書整備計画」(平成12年3月)

史跡糸数城跡の範囲は、史跡にふさわしく修復され、修景整備が実施される予定である。構想では、歴史的な正面性を踏まえて東側を入口としており、グスクロード沿い駐車場が整備済みである。また、史跡範囲や周辺の斜面緑地には、公園化ほか複合的な緑地保全措置が検討されている。(詳細は別途整理)

エ) 拠点施設・主なイベント・関連団体等

■南部観光案内センター

平成14年開設。南部地域の観光情報の提供や特産品の紹介を行っている。隣接するアブチラガマのガイド拠点となっている。

■沖縄の道自転車道

南城市前川と首里城公園とを結ぶ自転車兼歩行者専用道路で、グスクロードを中心に自転車歩行ルートが整備済みである。

■たまぐすく文化財ガイド友の会

東御廻りの聖地・城跡・湧水等の主な文化財(糸数アブチラガマ除く)といった南城市玉城の史跡を有料で案内している。南城市観光人材バンクに登録されており、活発に活動を展開している。

オ) 文化遺産保存・活用の課題

- 糸数グスクについては、戦闘が行われたところ・怖いところという印象が若い住民の間にみられ、グスクへの愛着を醸成する活動を強化する必要がある。
- 他の集落から糸数に嫁いだ女性が多いため、婦人たちの間で糸数の古くからの習慣や知識の継承がうまく図れていない面がある。婦人たちの学習意欲は高いが、十分な機会が用意できていない。
- 糸数グスクに近い南部観光案内センターは、南部観光に関する資料展示及び案内、糸数壕に関する情報提供など観光等に利用されている。糸数には文化財ガイドや糸数壕案内などで活躍している人がおり、当施設を拠点とした対応などについて将来的に考えていくことも大切である。

2) 保存・活用の方針

本区域にはグスク文化の花を咲かせた糸数城跡とその関連遺跡が立地しています。近世から集落の区割や伝統芸能を保持してきた地域であり、去る沖縄戦の爪痕を今に伝える糸数壕をはじめとした戦跡も貴重な資源の一つです。南部観光案内センターが立地し、観光情報やガイド等の人材の供給源になっていることも重要な地域資源だとみなされます。

本区域では、グスクと伝統的集落を歴史文化的に結びつけたモデル地域の形成を図ります。地域住民がグスクとの強い結びつきを再確認できるような取り組み——例えば文化遺産の管理や保存・活用、伝承の掘り起こし、関連行事の開催などを支援していきます。

■区域の歴史文化育成方針

①糸数グスクの魅力向上と関連文化遺産の整備に努める。

- 糸数は文化遺産がグスク内と集落内に比較的まとまっており、景観形成や修復整備など個々の資源の魅力アップを図り、コンパクトな分布を活かした文化遺産のネットワーク化に努める。
- 糸数グスクの発掘調査及び整備を推進し、糸数之嶽や根石グスクといった御嶽林の保護・育成を図る。また、グスクの管理や利用の利便性を高めるため、旧道である嶽殿坂（ダキドゥンビラ）の利活用を図る。

②緑がつながる魅力ある景観を形成する。

- 糸数グスクやその周辺を取り囲む緑地、集落の周辺にある緑地を保全するとともに、拝所、樋川、戦跡など文化遺産一帯の緑化を進める。眺望の利くところでは展望スポットの整備と、そこからみえる眺望景観の保全（高層建築物の開発規制など）を図る。
- 集落内に点在する資源を周遊できるように、集落美化によるスポット景観を形成する。また、集落道や沿線の景観整備、サイン整備を進める。

③市民と来訪者との歴史文化交流を支援する。

- 住民が地域の文化遺産にふれ学習する機会を増やし、年配者から若い人へと地域の歴史伝承や祭祀知識、芸能の身体技術等を伝えて、伝統文化を継承するモデルづくりを行う。
- 案内センターを活用して、案内ガイドなど歴史文化に興味を持つ市民と、観光客など来訪者が交流し、一緒に文化遺産を保全活用できるような体制づくりに努める。

図 区域の構想図

